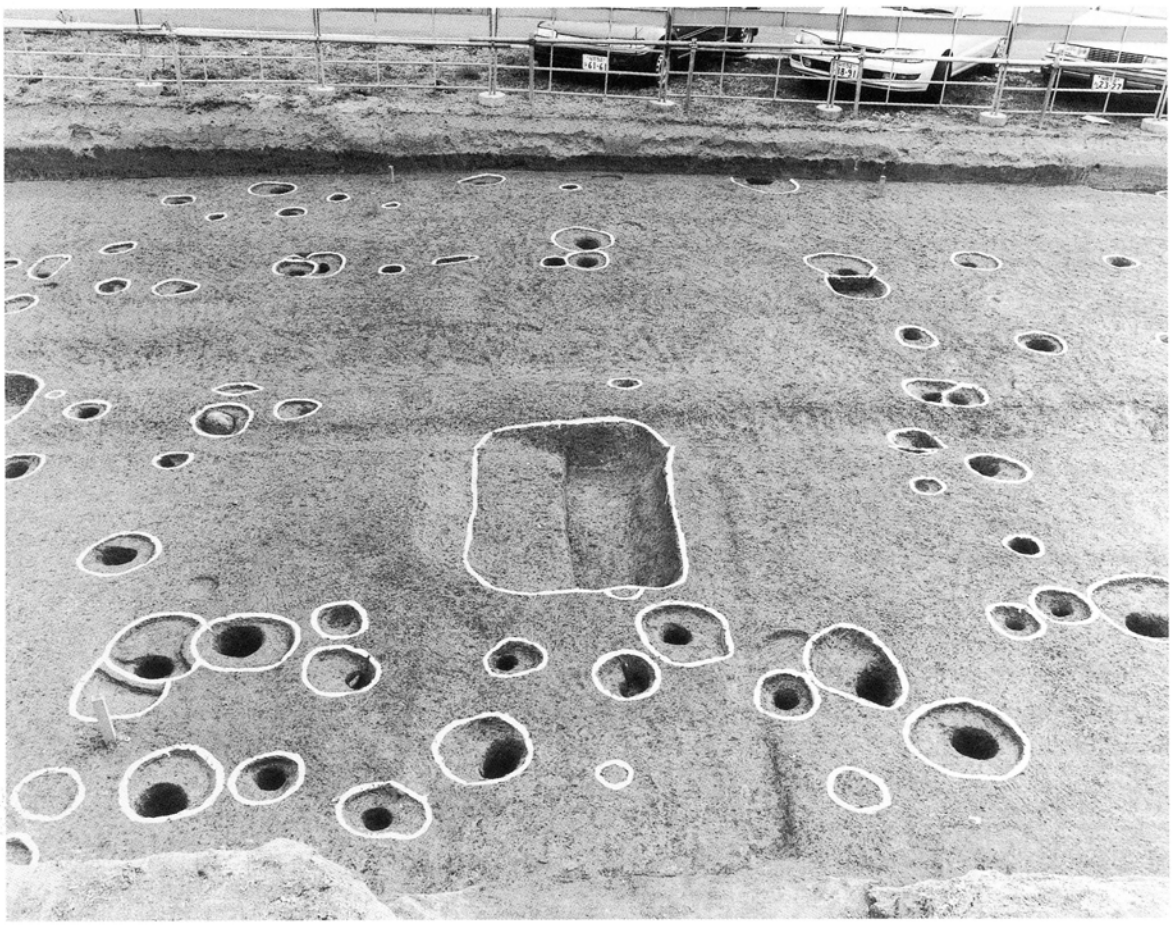
青　木　3

－青木遺跡群第4次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第734集



2003

福岡市教育委員会

＜正誤表＞

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 734 集『青木 3』－青木遺跡群第 4 次調査の報告－

（20 頁上段 Fig.26）

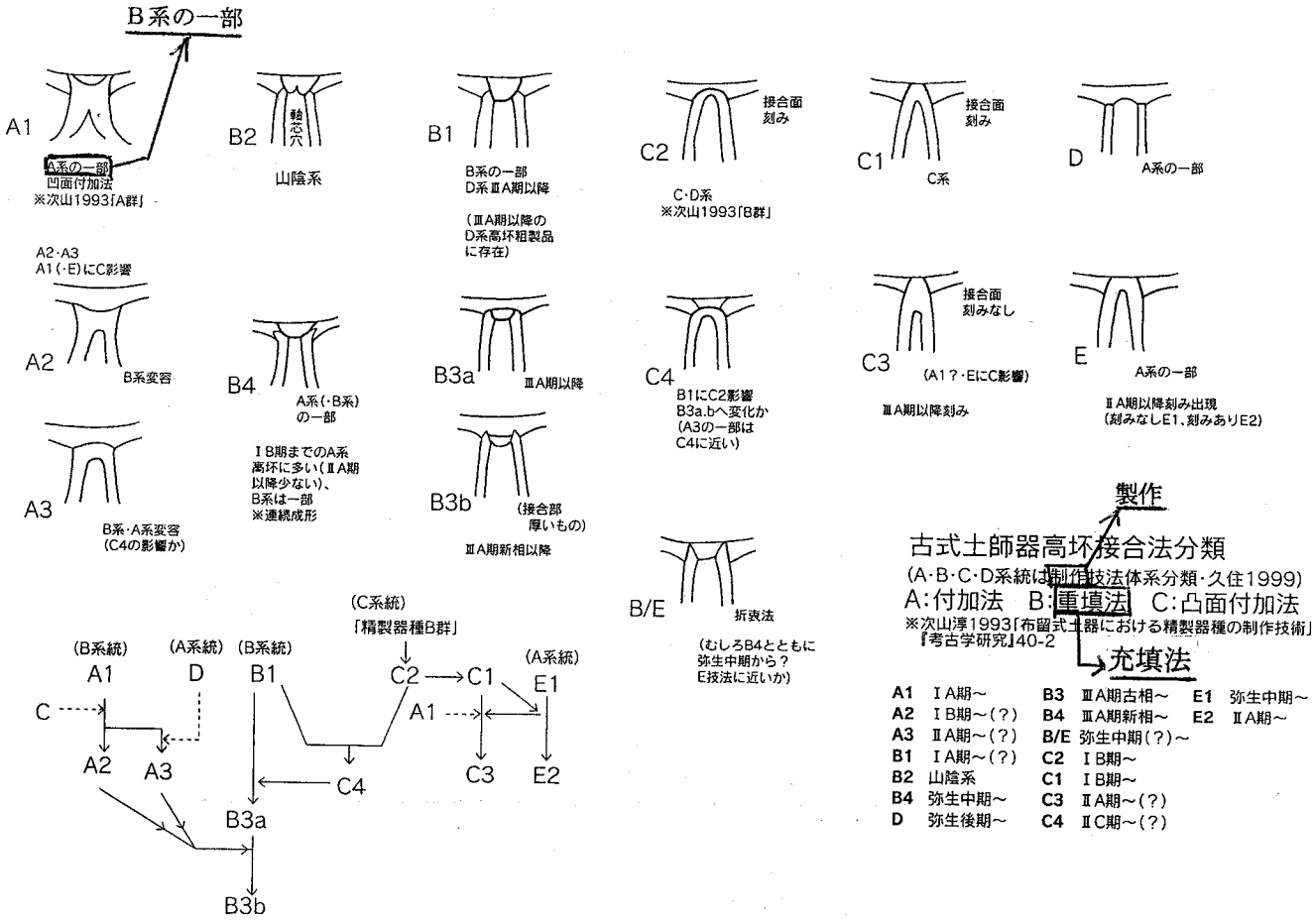
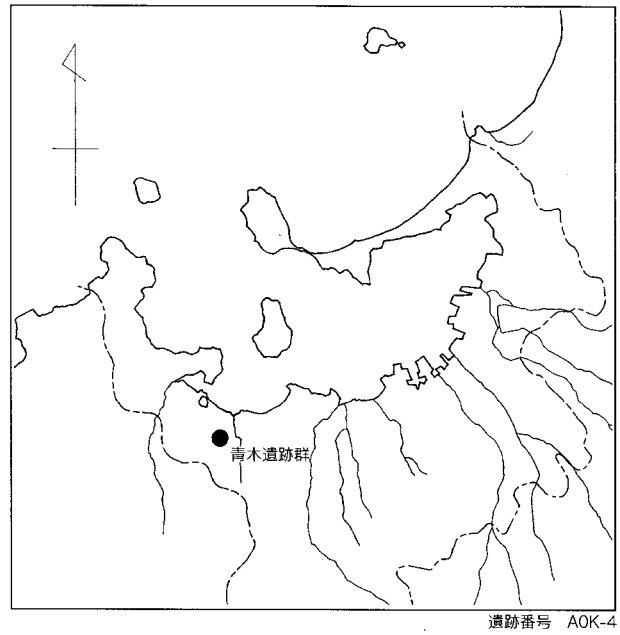


Fig.26 古式土師器高杯接合法分類図

青　木　3

－青木遺跡群第4次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第734集



遺跡番号　A0K-4
調査番号　0148

2003

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの史跡や文化財が分布しています。市域の西部にあたる今宿地区には、弥生時代の石器製作工房跡として著名な今山遺跡や、今宿大塚古墳をはじめとする大小十数基の前方後円墳が現存するなど、貴重な文化財と豊かな自然に恵まれています。

本書は、西区今宿東１丁目地内の共同住宅建設に先だって発掘調査を実施いたしました青木遺跡第４次調査の成果を報告するものであります。今回報告する青木遺跡は、今宿平野の東側に所在しています。周囲には弥生時代の環濠集落である今宿五郎江遺跡や、最古の横穴式石室を有する鋤崎古墳、5世紀の須恵器窯跡である新開窯跡など、弥生時代から古墳時代の遺跡が濃密に分布しています。また、青木遺跡の従来の調査では、弥生時代、古代、中世の集落跡が見つかっています。今回の調査では、今まで青木遺跡では知られていなかった、古墳時代および中世末から近世の集落跡を検出しました。これらは、この地における集落の変遷を考える上で貴重な資料となるものです。

本書が、文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査にご理解を頂き、費用負担などのご協力をいただいた岩瀬弘毅様をはじめとする関係各位の方々に対して厚く感謝の意を表します。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田 征生

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、共同住宅建設工事に伴い、西区今宿東１丁目121,122-1番地内において、平成14(2002)年１月７日から２月８日まで行なわれた青木遺跡第４次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物をSB、竪穴住居址をSC、溝状遺構をSD、土坑をSK、柱穴をSP、不明遺構ないし特殊遺構をSXとしている。
3. 本書に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものである。またレベルは、道路台帳地図に記されている周囲の道路面の標高を移動して用いた。
4. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄、山口裕平、榊原俊行、西堂将夫が実測・作成した。遺物の実測は、主に上方高弘（埋蔵文化財課整理調査員）が行ない、古式土師器を久住が行った。現場（遺構）写真と遺物写真は全て久住が撮影した。遺構図の整理と図面起こしは上方が行ない、久住が補った。製図は、上方、成清直子、吉田浩之が行った。遺物観察表の作成は上方が行なった。本書の編集・執筆は久住が行い、編集については上方の協力を得た。
5. 本調査に関わる遺物・記録類（図面・写真）は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

目　次

第1章　はじめに ……1
1.調査に至る経緯 ……1
2.調査の組織 ……1
3.調査地点の立地と環境 ……2
第2章　調査の記録 ……4
1.調査の概要 ……4
2.検出遺構 ……5
（1）溝状遺構 ……5
（2）土坑 ……6
（3）掘立柱建物 ……9
（4）竪穴住居 ……12
3.出土遺物 ……14
第3章　調査のまとめ ……19
（1）青木遺跡群周辺の集落の変遷について ……18
（2）古式土師器の分類と編年について ……19

挿図目次

Fig.1　青木遺跡群第4次調査地点と周辺調査地点の位置 ……1
Fig.2　青木遺跡群第4次調査区概要図 ……2
Fig.3　青木遺跡群第4次調査全体図 ……3
Fig.4　SD06・07実測図 ……4
Fig.5　SD05・06実測図 ……4
Fig.6　SD05～07土層図・断面図 ……5
Fig.7　SD01実測図 ……6
Fig.8　SD01土層図 ……6
Fig.9　SK01実測図 ……7
Fig.10　SK02実測図 ……7
Fig.11　SK11実測図 ……8
Fig.12　SK10実測図 ……8
Fig.13　SK08実測図 ……9
Fig.14　SK16実測図 ……9
Fig.15　SB01実測図 ……10
Fig.16　SB02実測図 ……10
Fig.17　SB05実測図 ……11
Fig.18　SB03実測図 ……11
Fig.19　SB04実測図 ……11
Fig.20　SB06実測図 ……12
Fig.21　SC01実測図 ……13
Fig.22　溝状遺構(SD)・土坑(SK)出土遺物 ……15
Fig.23　溝状遺構(SD)・柱穴(SP)出土遺物 ……17
Fig.24　SD06出土石製品 ……17
Fig.25　SC01出土遺物 ……18
Fig.26　古式土師器高坏接合法分類図 ……20

表目次

Tab.1　Fig.22出土遺物観察表 ……16
Tab.2　Fig.23出土遺物観察表 ……16
Tab.3　Fig.24出土遺物観察表 ……16

表表紙写真　青木４次調査全景（西から）

裏表紙写真　SK02、SB01・02写真（北から）

第１章　はじめに

１.調査に至る経緯

平成13（2001）年11月19日、岩瀬弘毅氏より、西区今宿東1丁目121、122-1地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された(13-2-682)。申請地は、青木遺跡群として周知されている範囲の北部にあたり、周辺の調査成果からも古代から中世までの遺構の存在の可能性が推定された。埋蔵文化財課では関係者と協議の上、平成13年11月29日に同地の試掘調査を行った。その結果、地表下50～70cm前後に柱穴や溝などの遺構が遺存していることが判明し、周囲と同様の遺構群の広がりが確認された。この試掘調査の結果をもとに、遺跡の取扱いについて関係者と協議を行った。その結果、共同住宅建設の建設予定部分について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意に達し、平成13年12月28日に岩瀬弘毅氏（委託者）と福岡市（受託者）との間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を交わすに至った。これを受け、福岡市教育委員会を調査主体として、2002年1月7日より発掘調査を開始した。発掘調査は、同年2月8日に終了した。

なお、整理作業は2002（平成14）年度に行い、同年度末に報告書を刊行した。

２.調査の組織

調査委託：　岩瀬弘毅

調査主体：　福岡市教育委員会　教育長　生田征生

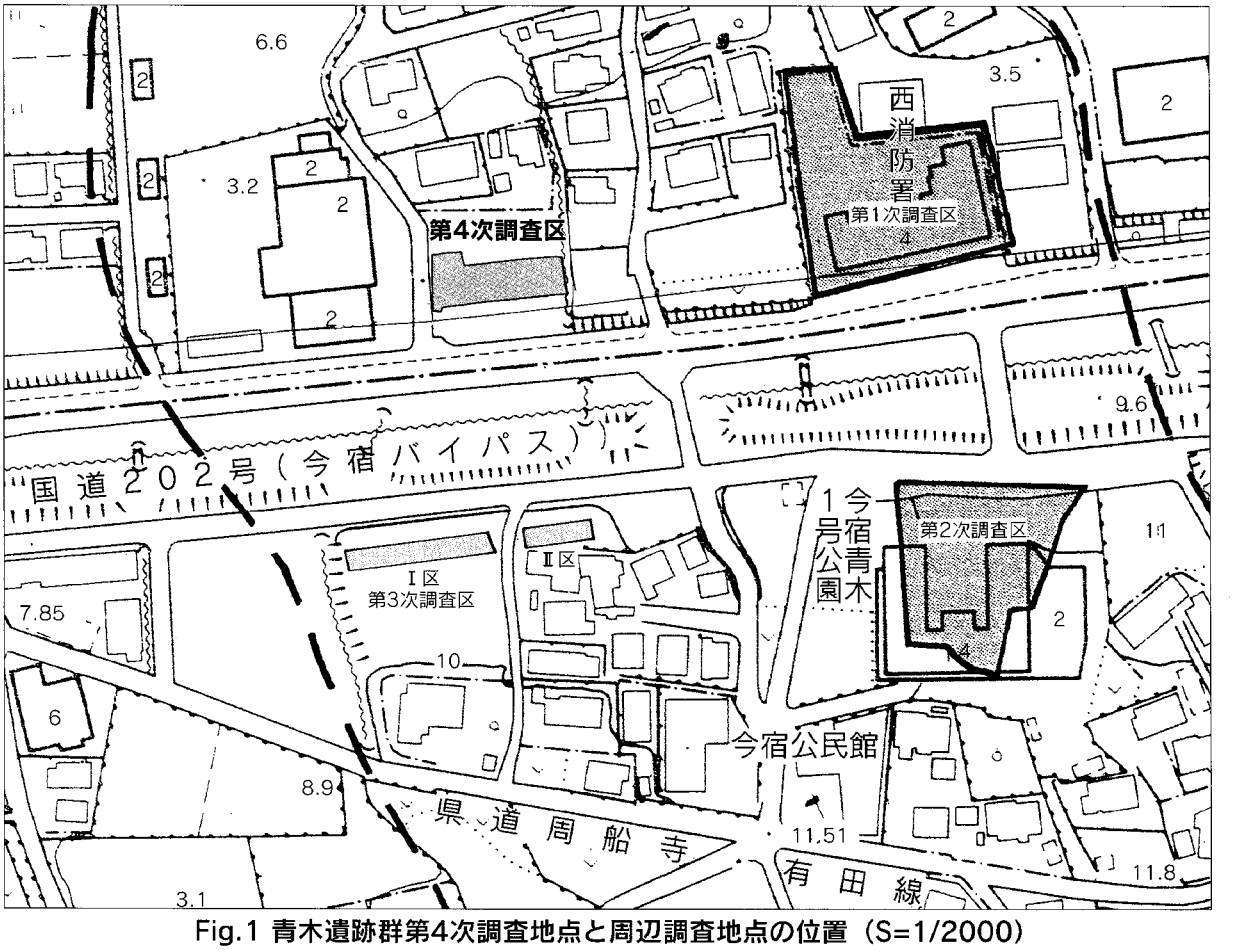


Fig.1 青木遺跡群第4次調査地点と周辺調査地点の位置（S=1/2000）

調査総括： 埋蔵文化財課　課長　山崎純男
調査第一係長　山口譲治（調査年度）、力武卓治（整理年度）
調査庶務： 文化財整備課　宮川英彦（調査年度）、川村浩旭（整理年度）
事前審査： 埋蔵文化財課事前審査係長　田中寿夫
事前審査係　田上勇一郎（試掘担当）
調査担当： 埋蔵文化財課調査第一係　久住猛雄（整理年度は事前審査係）
調査作業： 加藤勲、柴田常人、島崎昭二、高木美千代、高木章夫、田中和祐、田中肇、
中山竹雄、林末孝、林チセ子、山口裕平、榊原俊行、西堂将夫
整理作業： 上方高弘、成清直子、甲斐田嘉子、日下部由美子、川鍋紀子、横山香織、吉田浩之

3.調査地点の立地と環境

青木遺跡群は、今宿平野東部から中央部の、七寺川左岸の標高10m前後の舌状の低丘陵上に位置する。埋蔵文化財包蔵地の想定範囲は南北1000m、東西200～400mである。過去3回の調査は、遺跡群の北半で行なわれ、弥生時代と古代、中世を主とする遺構と遺物が検出されている。今回の調査地は、遺跡想定範囲の北東部に位置し、現在の標高は8.5～8.8m前後である。なお、包蔵地の南半では本調査が未だにされていないので、その実態は不明な部分が多い。

これまでの青木遺跡群の調査について概観しておく（Fig. 1）。第1次調査は、西消防署の建設に伴い実施された（福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集『青木遺跡』）。13世紀前後の掘立柱建物と溝からなる集落、弥生時代中期の竪穴住居・掘立柱建物・土坑からなる集落、弥生時代後期の溝状遺構・甕棺墓などを検出している。弥生時代中期の集落では、玄武岩製の石斧製作失敗品や各種石器未製品などが多く出土している。第２次調査は、共同住宅建設に伴い実施された（福岡市埋蔵文化財調査報告書第350集『青木遺跡２』）。掘立柱建物・土坑・井戸・溝からなる中世（13～14世紀）の集

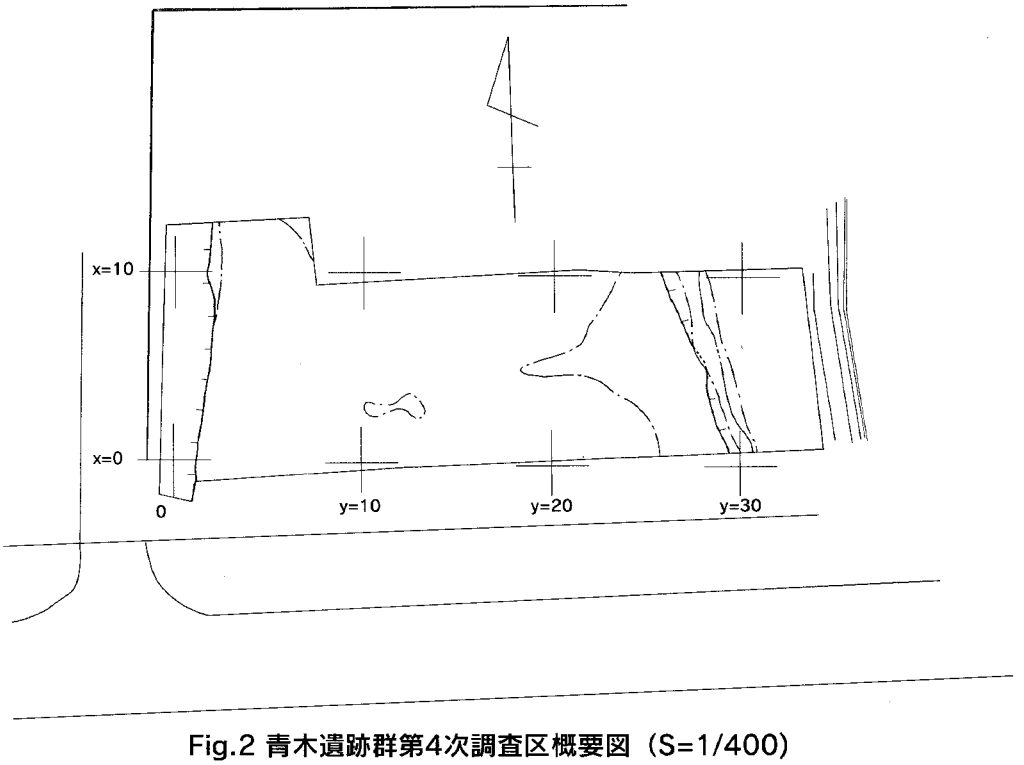


Fig.2 青木遺跡群第4次調査区概要図（S=1/400）

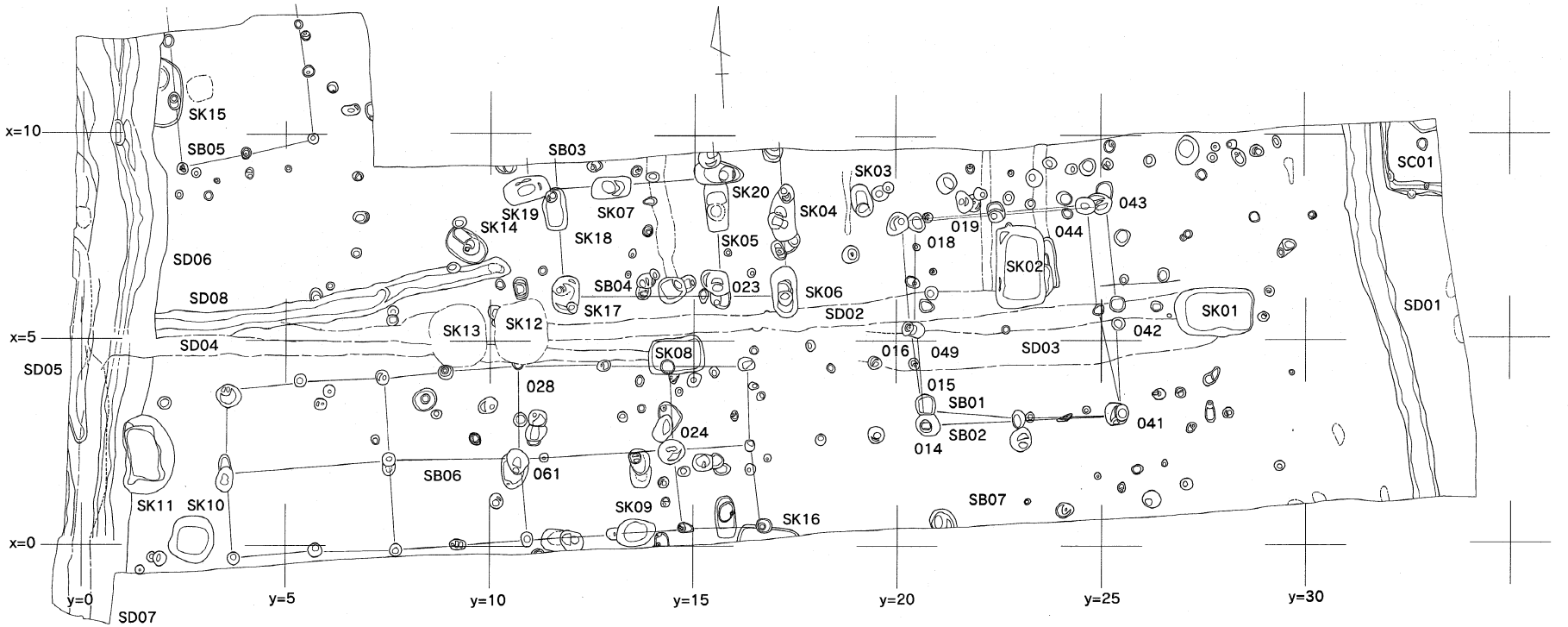


Fig.3 青木遺跡群第4次調査全体図（S=1/160）

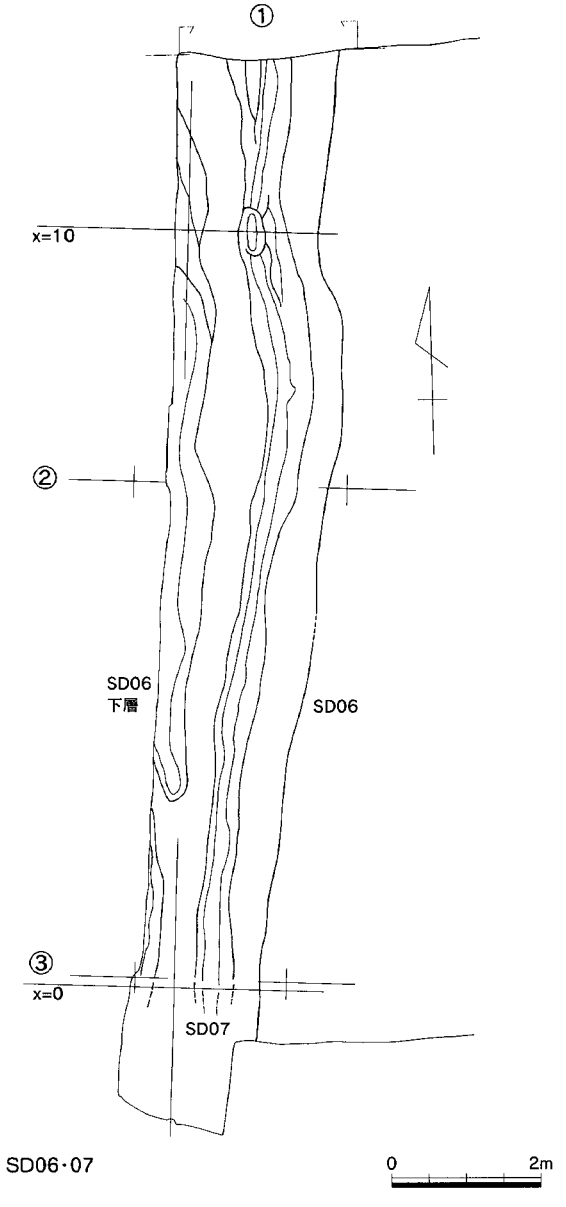


Fig.4 SD06・07実測図（S=1/100）

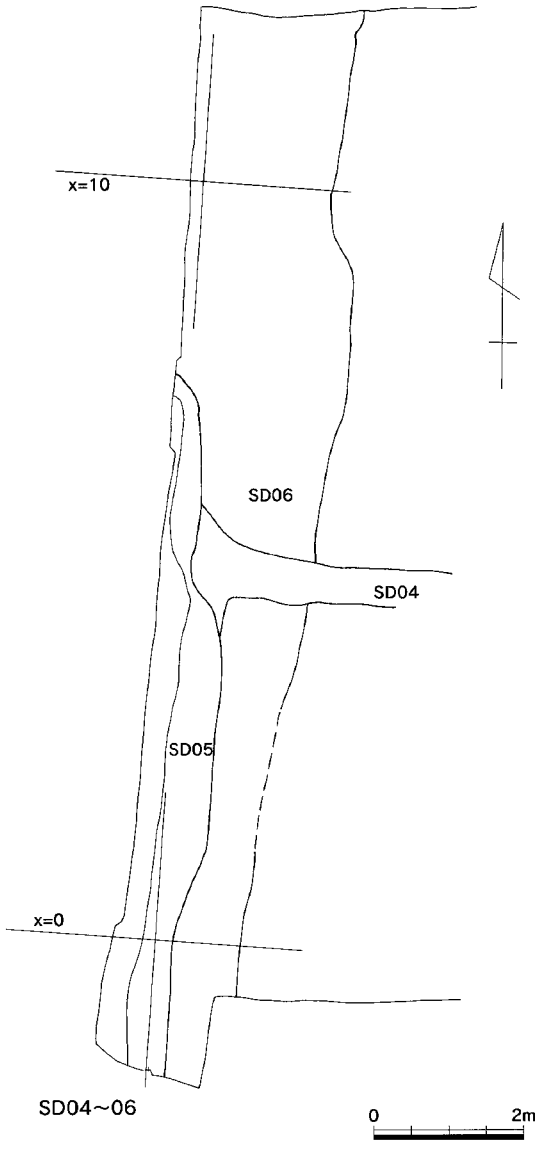
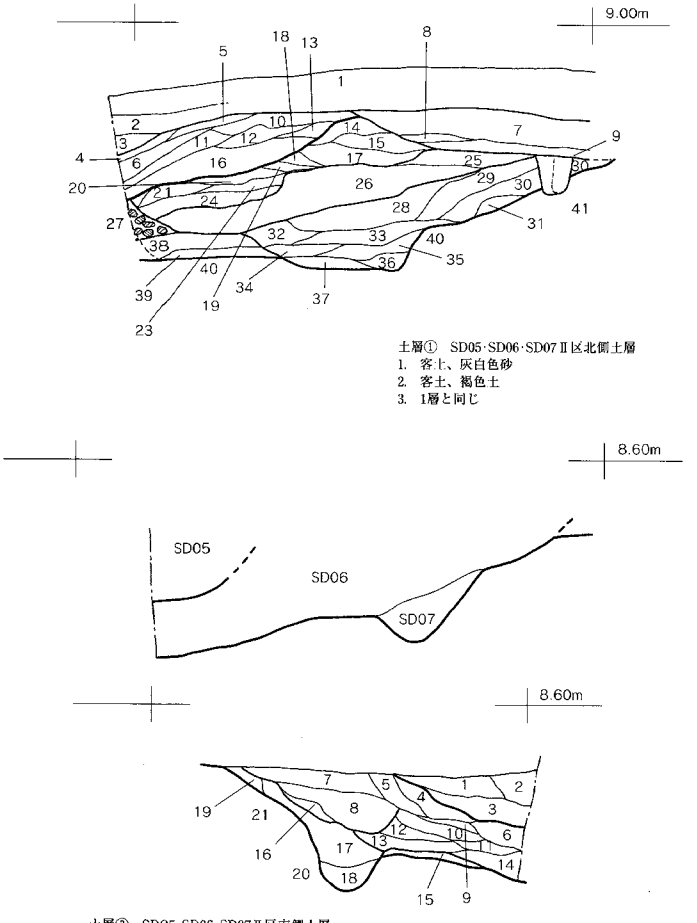


Fig.5 SD05～06実測図（S=1/100）

落、弥生時代中期（～後期）の井戸・竪穴住居からなる集落を検出している。遺物には奈良時代のものも含む。中世の集落は、矩形ないし方形に囲郭する溝があり、屋敷地を形成する。弥生時代中期では、1次調査と同様に玄武岩製石斧未製品（または失敗品）が出土している。第3次調査は、国道202号線今宿バイパス建設に伴い実施された（福岡市埋蔵文化財調査報告書第583集『国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』「Ⅴ.青木遺跡第3次調査」）。調査区の東側（Ⅱ区）では削平が顕著で遺構は検出されていないが、西側（Ⅰ区）において溝と掘立柱建物からなる中世（13～15世紀か）の集落が検出されている。

なお第４次調査とは道を挟んだ西側敷地は、近年の試掘の結果、急激に旧地形が落込み、GL－2m以下の谷となることが判明し、近世頃の水田面の可能性はあるが、遺跡としては広がらないと判断されるに至っている。



土層① SD05·SD06·SD07Ⅱ区北側土層
1. 客土、灰白色砂
2. 客土、褐色土
3. 1層と同じ

土層③ SD05·SD06·SD07Ⅱ区南側土層
(SD05)
1. にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫ほとんどなし、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿やや多い
2. 橙～鈍い橙色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿非常に多い
3. 灰黄褐色粘質シルト、粘性あり、ややしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿なし、酸化鉄沈殿若干あり

(SD06)
4. 灰黄褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿なし、酸化鉄沈殿若干あり
5. にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿なし、酸化鉄沈殿若干あり

(SD05)
4. 暗褐色土＋赤褐色土ブロック少し
5. 褐色土
6. にぶい黄（灰）褐色土の少し混じる赤橙色土
10. にぶい褐色土～明褐色土（黄褐色気味）
11. やや暗い黄褐色シルト（にぶい黄褐色土）
12. 11層のにぶい黄褐色土に13層の暗くにぶい褐色気味黄灰褐色土混じる
13. やや暗くにぶい黄褐色～黄灰褐色土（褐色土気味）
16. にぶい黄灰褐色土＋赤橙色土ブロックのシルト質土、17·19層に似るがより黄色で明るい
7. 暗褐色～褐色耕作土
8. 明褐色土
9. 黄褐色～黄橙褐色土、酸化鉄沈殿

(SD06)
14. 褐色土＋にぶい黄褐色土
15. にぶい黄灰褐色土＋黄褐色土、マンガン沈殿あり、17層より明るいが褐色気味
17. 16層に似るがわずかににぶく暗い、黄灰褐色シルトに赤褐色土ブロック少し含む
18. にぶい黄灰褐色土シルト間層（やや粘質）
19. 17層と同じ
20. （暗い）褐色土（7.5YR系）に灰白色シルト水平に含む
21. やや暗い褐色土（10YR系）、少し礫含む
22. 21層の褐色土に16層の赤褐色土＋黄褐色土混入
23. バイラン土の小礫含む、赤褐色土＋褐色～にぶい黄褐色土
24. 暗褐色～褐色シルト、26層より褐色·黄褐色気味
25. （明るい）褐色＋黄灰褐色土混じり、26層より明るく17層より濃い
26. 暗い感じのする（暗）灰黄褐色土、17より明らかに灰色気味で暗い（黄褐灰色）、10YR系

(SD07)
28. 26層より暗い7.5YR系暗褐色土
29. 28層とあまり変わらない褐色土、やや黄褐色気味、26層より少し暗い（7.5YR系）
30. 29層とあまり変わらないが、やや赤味の（5YR系）褐色シルト～黄褐色土混じり
31. にぶく暗い（赤）褐色土＋褐色土（5～2.5YR系）
32. 28層より少し暗い、暗褐色～褐色土（7.5YR系）、砂礫少し含む、灰褐色土少し混じる
33. 32層より少し明るく、28層より暗い、暗褐～暗褐灰色土、（5YR系）
34. 32に似る、暗褐色～褐色土、（5YR～7.5YR系）
35. 灰褐色土＋赤褐～赤灰褐色粘質シルト（5～2.5YR系）
36. にぶく暗い赤褐灰色土＋（赤味のある）褐色土＋砂礫
37. 砂礫多い、灰褐色土＋褐灰色土·赤褐灰色（粘質シルト）
27. 礫を多く含む、暗褐灰～褐色土、周囲より暗い色
28. 26層より暗い、7.5YR系暗褐色土
38. やや赤味のある暗褐灰色土、やや粘質シルト（＋赤褐色土粒子）
39. 38層＋40層、赤褐色土ブロック含む
27. 礫を多く含む暗褐灰色～褐色土、暗い土（地山）
40. 花崗岩礫多い、赤褐色～黄灰色粘質土
41. 花崗岩礫やや多い、明赤褐色粘質土（地山）

6. 灰黄褐～にぶい黄褐色粘質シルト、やや固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずかに、酸化鉄沈殿少しあり
7. にぶい黄褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿多い
8. にぶい黄褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫含む(7層より多少多い)、マンガン沈殿少しあり、酸化鉄沈殿多い
9. 橙～にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿非常に多い
10. にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿多い
11. にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、ややしまる、砂礫少し含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿少しあり
12. にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿やや多い
13. にぶい黄褐色シルト質粘土、やや粘性高い、固くしまる、砂礫少し含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿やや多い
14. にぶい黄褐色シルト質粘土、やや粘性高い、固くしまる、砂礫少し含む、マンガン沈殿少しあり、酸化鉄沈殿やや多い
15. 橙～にぶい黄褐色シルト質粘土、やや粘性高い、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿非常に多い
16. にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿少しあり

(SD07)
17. にぶい黄褐～灰黄褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫少し含む、マンガン沈殿少しあり、酸化鉄沈殿若干あり
18. にぶい黄褐色シルト質粘土、粘性かなりあり、固くしまる、砂礫少し含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿若干あり
19. にぶい黄褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿やや多い（地山）
20. 橙～にぶい黄橙色粘質シルト、やや粘性高い、固くしまる、砂礫少し含む、マンガン沈殿ごくわずか
21. にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫少し含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿少しあり

Fig.6 SD05～07 土層図、断面図（S=1/40）

第２章　調査の記録

１.調査の概要

まず調査の経過について記す。平成14年1月7日に、調査器材を搬入し現場を設営することより、現地における調査が開始された。なお調査事務所のユニットハウスは、委託者側のご協力で現物支給されたものである。1月8日には重機による表土掘削を行なった。以後、遺構検出、遺構掘削・精査を1月末まで行なった。吹雪や強風でかなり冷え込む日もあったが、比較的天候の良い日が続き、1月24日には調査状況の全体写真を撮影することができた。記録作業や遺構の掘削・精査の補足作業を２月６日までに終了し、２月７日には現場と事務所の器材を撤収した。２月８日に重機により調査区の埋戻し作業を行ない、現地における調査は完全に終了した。遺構検出面は、調査区東側ではGL－100～110cmで標高7.7～7.8m、調査区中央から西側でGL－30～50cmで標高8.2～8.3mである（Fig.２、２頁）。遺構検出面の地山は、黄褐色粘質土ないし花崗岩小礫混じりの明赤褐色土で、黄褐色粘質土などは一見ロームに類似するが、花崗岩風化土の再堆積層と考えられる（遺構検出面までの層序は、Fig.6上段とFig.8を参照）。

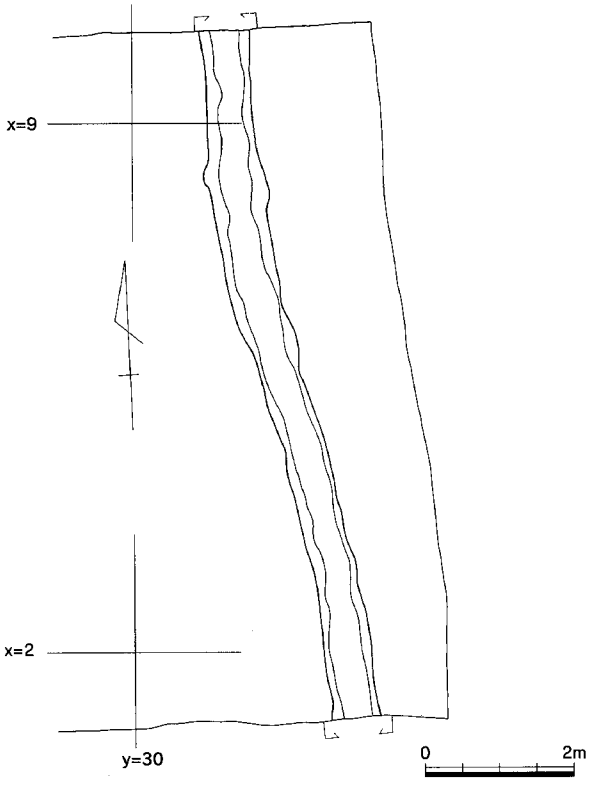
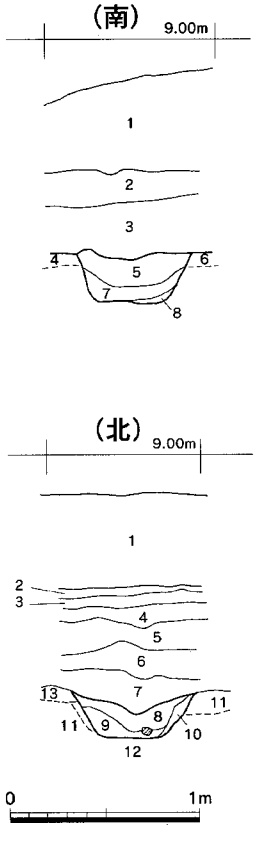


Fig.7 SD01 実測図（S=1/100）



SD01南壁土層
1. 表土、褐灰色土、礫多く含む、しまりなし、竹の根による撹乱（客土）
2. 黄灰色粘質シルト、マンガン沈殿少しあり(耕作土)
3. 暗灰褐色粘質シルト、上部にマンガン沈殿やや多い（耕作土床土）
4. 灰色～黄褐色粘質土、黄褐色強い(地山)
5. 褐色の強い灰褐色粘質土
6. 4層と同一(地山)
7. 灰色の強い灰褐色粘質土
8. 灰褐色粘質土、黄褐色地山土混じる

SD01北壁土層
1. 表土（客土）
2. にぶい褐色シルト、やや粘性高い、固くしまる、砂礫ほとんどなし、マンガン沈殿わずかにあり、酸化鉄沈殿多い（旧表土）
3. にぶい橙色シルト、粘性あまりない、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿なし、酸化鉄沈殿若干あり(耕作土)
4. 橙～にぶい黄橙色シルト、粘性やや高い、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿非常に多い（耕作土床土）
5. にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿多い、酸化鉄沈殿若干あり(床土)
6. 灰褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿少しあり、酸化鉄沈殿若干あり(床土)
7. 明灰褐～にぶい褐色粘質シルト、粘性あり、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿なし（二次的な包含層）)
8. 灰褐色シルト質粘土、粘性かなり高い、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿少しあり、酸化鉄沈殿若干あり
9. 灰褐～にぶい褐色シルト質粘土、粘性かなり高い、固くしまる、砂礫ほとんどなし、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿少しあり
10. 橙～にぶい黄橙色シルト質粘土、粘性かなり高い、固くしまる、砂礫若干含む、マンガン沈殿多い、酸化鉄沈殿非常に多い
11. 橙～にぶい黄橙色シルト質粘土、粘性かなり高い、固くしまる、砂礫ほとんど含まない、マンガン沈殿ごくわずか、酸化鉄沈殿非常に多い（13層も同一、地山）
12. 橙～にぶい黄褐色シルト質粘土(赤土地山)、非常に固くしまる、砂礫ほとんど含まない、マンガン沈殿少しあり、酸化鉄沈殿少しあり(地山)

Fig.8 SD01 土層図（S=1/40）

検出した遺構は、柱穴（ピット）群（掘立柱建物６棟以上）、土坑（方形・円形のやや大きめの掘り込み）19基、溝６条（近世以降も含む）、竪穴住居１棟などである（Fig.３、３頁）。多くの遺構は、出土した遺物から中世末（16世紀）から近世（江戸時代）中期後半（18世紀後半）までのものと考えられる。近世の遺構については、明らかに新しいもの（近世末以降現代）を除き、中世の遺構の覆土と区別がつかないものは調査の対象とした。なお竪穴住居は、古墳時代前期のものと考えられる。また土坑（SK）としたものには、大きめの柱穴の可能性があるものが含まれ、また井戸や墓の可能性のあるものを含む。

柱穴は少なくない数を検出した。柱穴の中には、柱痕跡の土層や柱材そのものが遺存するものがあり、この地に何らかの建物が存在していたと推定できる。柱穴は調査区全体に存在するというよりも、特定の柱筋にかたまって、重複して検出されたものが多く、同一の場所で何度か建て替えられたと考えられる。図面上での検討から、掘立柱建物は最低６棟が復元でき、調査区外に展開すると予想されるものを含めれば10棟以上の可能性がある。なお建物群の時期は、柱穴の出土遺物から、16～18世紀のものと考えられる。溝は、調査区の東端を南北に走る細い溝(SD01)と、西端を南北に走る幅広の溝（SD06）がある。いずれも建物群を囲む、屋敷地の東西の境界を示す溝であろう。西側の溝は３条が重複し（SD05～07）、まず16世紀頃に細い溝（SD07）があり、16世紀末から17世紀に幅広い溝となり（SD06）、18世紀初めまでに埋没が進むが、その後（18世紀代）掘り直しされたとみられる（SD05）。なお前述したように、調査区西側は試掘の結果から、急激に落込む谷地形で

あり、調査区西端の溝は地形上の変換線際に掘られていることになる。

2.検出遺構

(1) 溝状遺構 (SD)

SD06 (Fig.4、図版2-2~5) は、調査区西端で検出した略南北の溝。西側の立ち上がりは調査区外であり、未検出である。現状で幅2m以上、深さ60cmの推定幅広の逆台形である。調査区西側際で少し深くなる (Fig.4のSD06下層)。**SD07**は、SD06の東側底面で検出した幅の狭い (35~80cm) 溝。方位はN (磁北) −6~7°−Eである。土層の観察から (Fig.6)、幅狭のSD07が先に存在して、その後SD07の軸を踏襲して幅広のSD06が大きく掘削されたようである。SD06の時期は、遺物 (Fig.22-5,8~11) からは、上面で18世紀中頃があるがこれは埋没後と思われ、他は16世紀後半~17世紀の幅である。遺物が少なく難しいが、おそらくは16世紀後半のある時期にSD07が掘削され、土層からそれがあまり埋没しない時期の16世紀末頃にSD06が掘削されたものと考える。

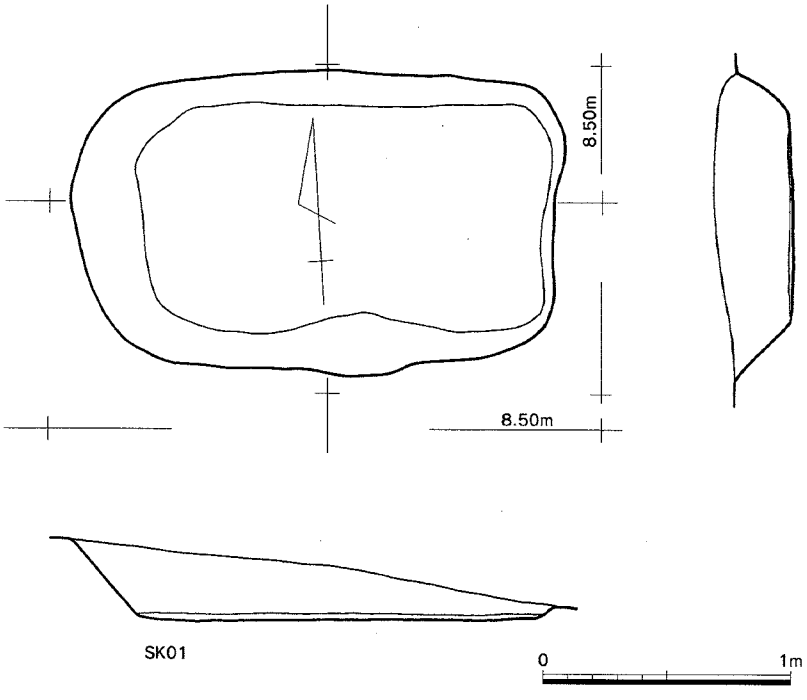


Fig.9 SK01実測図 (S=1/30)

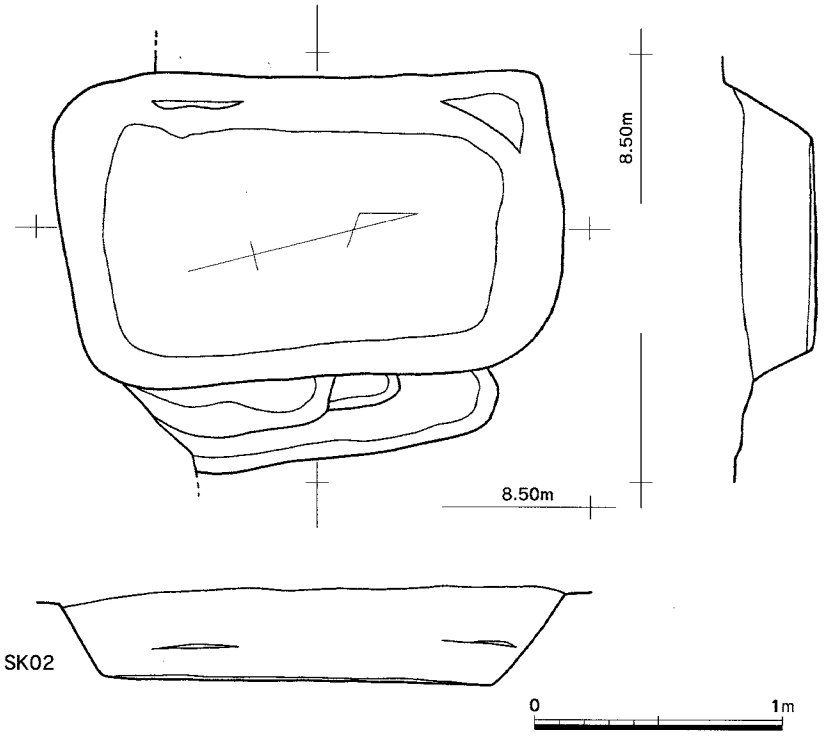


Fig.10 SK02実測図 (S=1/30)

SD05と**SD04** (Fig.5) は、SD06が埋没後に掘削された直交する溝。これらの溝はかなり新しく、遺物から18世紀以降か。SD05は18世紀前半~中頃で、SD04は18世紀中頃以降のSK12とSK13を切り (Fig.3の全体図では逆に表現されるが切合いはSD04が新)、さらに新しい溝である (18世紀後半以降)。なお、調査区中央を略東西に走るSD08、SD02、SD03のうち、SD08

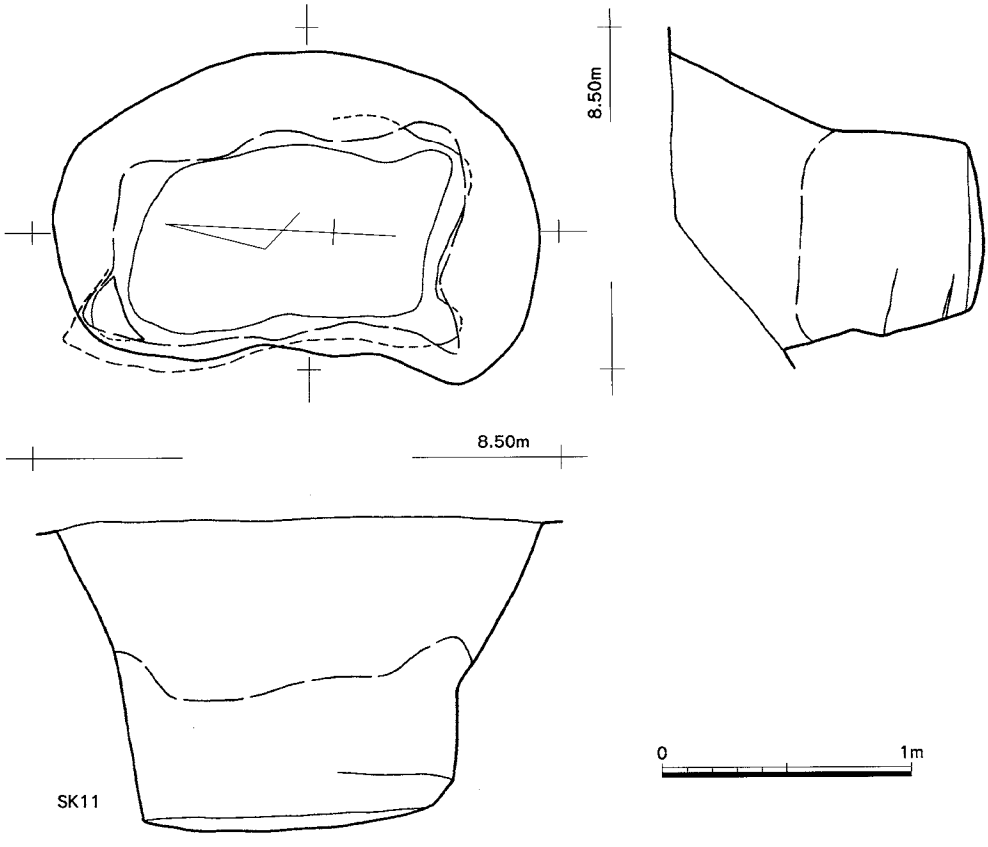


Fig.11 SK11実測図（S=1/30）

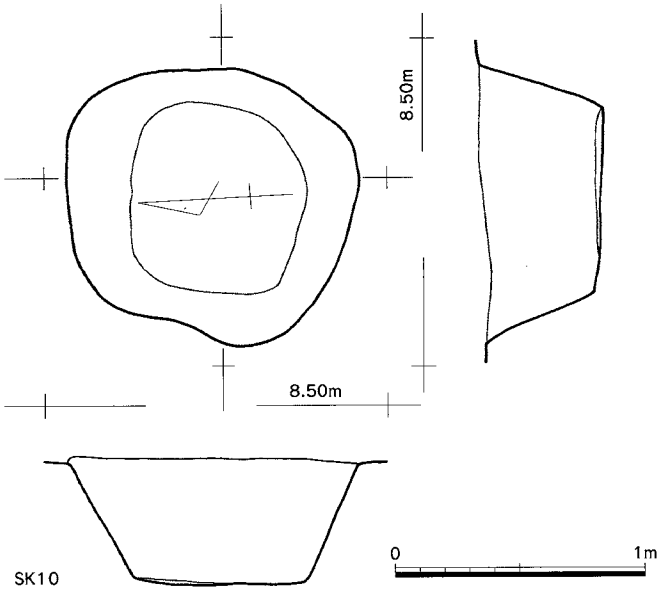


Fig.12 SK10実測図（S=1/30）

は次のSD02を切り、18世紀後半の溝（SD06上面では浅くなり、Fig.3では切合いの表現が逆になっている）、**SD02**は非常に浅く他との関係が不明だが、少なくともSD04に切られつつもほぼ同じ方向を踏襲するので18世紀中頃以降の溝、**SD03**は方向的におそらくSD04と同一の溝と推定される。これらは集落廃絶後の（集落は18世紀中頃までか？）、この土地が耕地化した以後の灌漑に関わる溝であろう。

SD01（Fig.7、図版3-1,2）は、調査区東側で検出した略南北方向の溝。幅50～80cm、深さ20～30cmを測るが、遺構検出面の段落ちから耕地化により削平されていると考えられる。蛇行して走行するが、方位はおおむねN－7～8°－Wである。削平で浅いので断定できないが、土層からは掘り直しなどは不明である（Fig.8）。遺物は少ないが、遺物から16世紀（～17世紀前半？）頃と考えられる。

（2）土坑（SK）

SK01（Fig.9、図版4-1）は、120×195cmの隅丸長方形、深さ30cm強の土坑。東側が若干削平される。底面がフラットであり、墓の可能性も考えたが不明。出土遺物はほとんど皆無である。

SK02（Fig.10、図版3-4）は、120×204cmの隅丸長方形、深さ40cm前後の土坑。SK01と類似するプランであり、位置・方向が直交する関係にある。SK01と同様に底面が平坦であり墓の可能性も考えたが、断定できない。それよりも、SB01・02の中央に軸を揃えて存在することから（図版3-4）、これら建物の屋内土坑かもしれない。遺物は非常に少なく皆無に近いが、青花片の出土から（Fig.22-13）、16世紀末～17世紀前半頃の遺構か。なお図中の土坑東側の段は、土坑と関係ない新しい溝の一部を拾っている可能性がある。

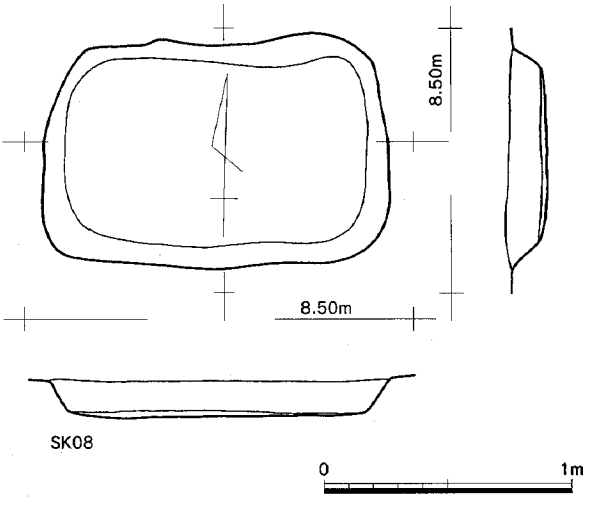


Fig.13 SK08 実測図（S=1/30）

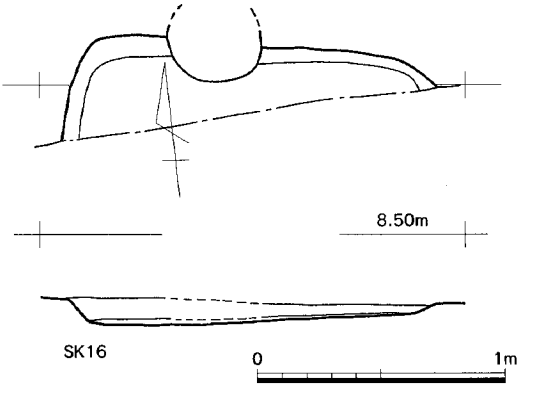


Fig.14 SK16 実測図（S=1/30）

SK11（Fig.11、図版3-3）は、上面では120×195cmの不整楕円形だが、掘り方中位で90×135cmの長方形となり、深さ125cmとなる土坑である。SD06に切られる（Fig.3では逆のようになっているが、これは完掘後の状況）。掘方中位以下での平面形プランと、壁が垂直化する状況は、本来板壁でもあったかと思われるもので、深さも他の土坑より格別に深く、あるいは井戸の可能性がある（ただし現在は湧水がほとんどない）。遺物は非常に少なく、皆無に近いので時期は不詳だが、SD06との関係から16世紀後半頃であろうか。

SK10（Fig.12）は、SK11の南側で検出した、105×120cmの不整円形土坑。深さ50cmを測る。性格は不明。遺物はほとんど皆無で時期不詳である。

SK08（Fig.13、図版3-6）は、90×140cmの隅丸長方形で、非常に浅い土坑。SB06に切られる。遺物はほとんど皆無で時期不詳。

SK16（Fig.16）は、150cm長の推定隅丸長方形の土坑。深さなども含めてSK08と同様。遺物はほとんど皆無で時期不詳。

その他、**SK12**と**SK13**は、それぞれ径120～130cm前後の円形ないし隅丸方形の土坑。いずれも上層を掘削した時点で非常に新しいものと判明したので途中で掘削を放棄した。遺物は、肥前系陶磁器などが多く出土し、18世紀中頃～後半である（Fig.22-14~25）。

（3）掘立柱建物（SB）

SB01（Fig.15、図版3-4）は、2×2間の建物で、4.8×5.2m。N－2.5～3°－W。SB02を切る。SP015より16世紀頃の土師器皿が出土している（Fig.23-2）。

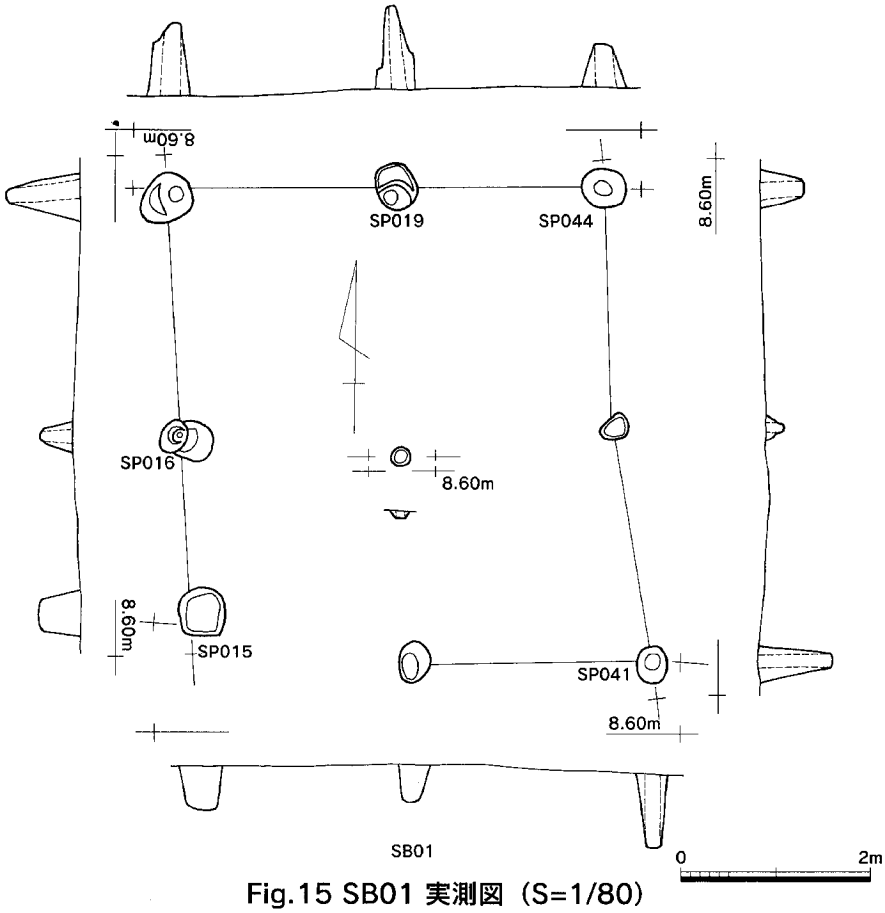


Fig.15 SB01 実測図（S=1/80）

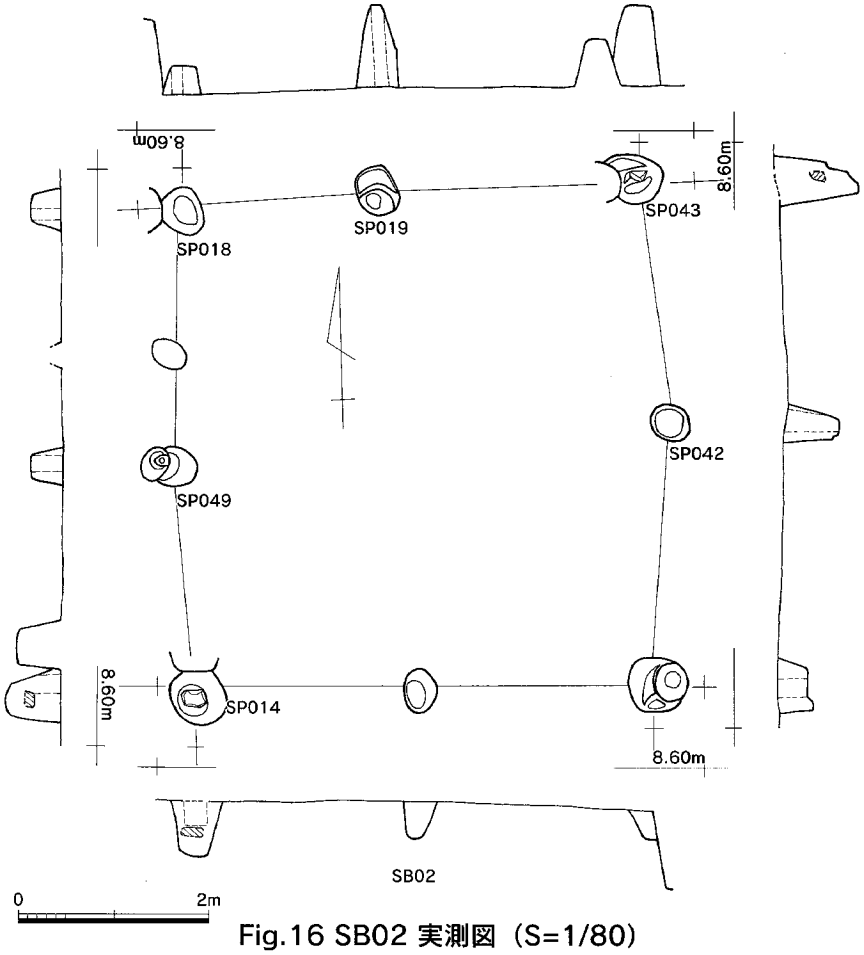


Fig.16 SB02 実測図（S=1/80）

SB02（Fig.15、図版3-4）は、2×2間の建物で、5.0×5.2m。SB01に切られるが、ほぼ同じ規模・プラン・場所であり、SB01は連続する建替えであろう。N－1°－W。SP049より16~17世紀の土師器坏が、SP042より16世紀頃の土師器皿が出土している（Fig.23-5,7）。したがって、16世紀末～17世紀前半の建物であろう。

SB05（Fig.17、図版2-4）は、2×2間以上、3.3×3.2m以上の建物。柱穴はいずれも小規模。N－5°－W。遺物はほとんど皆無で時期不詳。

SB03（Fig.18、図版3-5手前）は、梁間2間（4.9m）の建物で、桁行側は調査区外で不明。N－1°－E。柱穴はやや大きく、当初「土坑（SK）」としたもの。土坑状の掘方に柱痕が残る（柱は抜き取られているものもある）。SB04を切る。遺物はほとんど皆無で、時期不詳だが、16世紀以降の他の建物の柱穴と覆土は類似する。

SB04（Fig.19、図版3-5）は、梁間1間で東側に半間分の幅の庇ないし縁側が付く建物。

桁行側は調査区外に延びるので、1間しか分からない。現状で5.6×2.4m以上。N－3°－E。SB03に切られるが、柱穴の特徴はSB03に類似する。遺物はほとんど皆無で、時期不詳だが、16世紀以降の他の建物の柱穴と覆土は類似する。東側2列の柱穴にほぼ一致して重複する柱列があり、建て替えもしくは別の細長い建物が切っている。

SB06（Fig.20、図版1-2）は、調査区西側南半に東西にある大きな建物で、2×8間、4.2×12.8m。N－89°－W。屋内東西中軸に、3本の屋内棟持柱ないし束柱がある。柱穴は総じて小さめのものが多い。出土遺物は非常に少ないが、SP024より18世紀前半の遺物が出土し(Fig.23-8)、その時期であろう。

そのほか、SB01・02の南側の調査区南端で、3本の柱穴列からなる柱筋があり（5.2m長）、これを**SB07**とする（Fig.3全体図参照）。SP040とSP045から土師器皿が出土しており(Fig.23-6,9)、16～17世紀前半の建物であろう。また、SB01の北側から東にかけて少なくとも2棟分の柱筋があり、さらにSB06東半に絡む2～3棟分の柱筋などがあるが、今回はそれらについては建物の可能性を指摘するにとどめておく。

なお建物の時期は、柱穴が比較的しっかりしているものはやや古い16～17世紀代に、柱穴が小さめなSB06やSB05は18世紀代になる可能性があり、後者の柱穴覆土は灰色味が強く、前者は褐色味がある傾向にある。建物方位は、両者とも類似するので方位による時期類別は難しい。

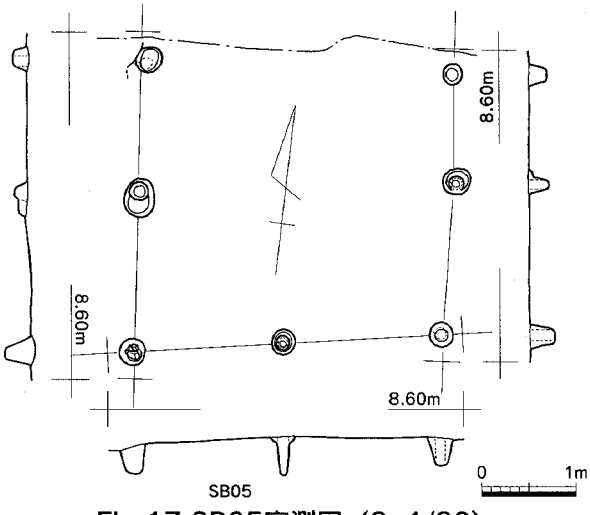


Fig.17 SB05実測図（S=1/80）

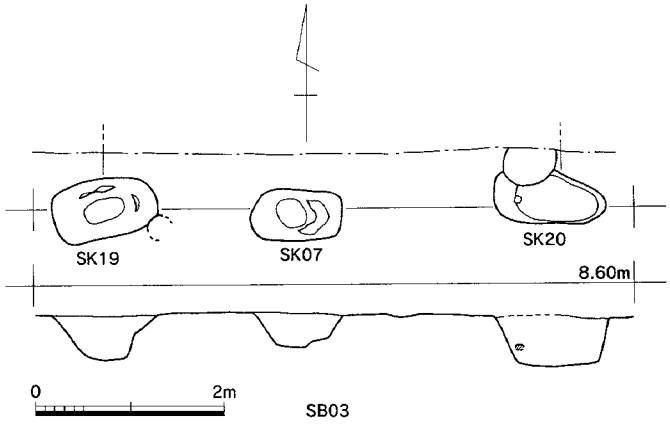


Fig.18 SB03実測図（S=1/80）

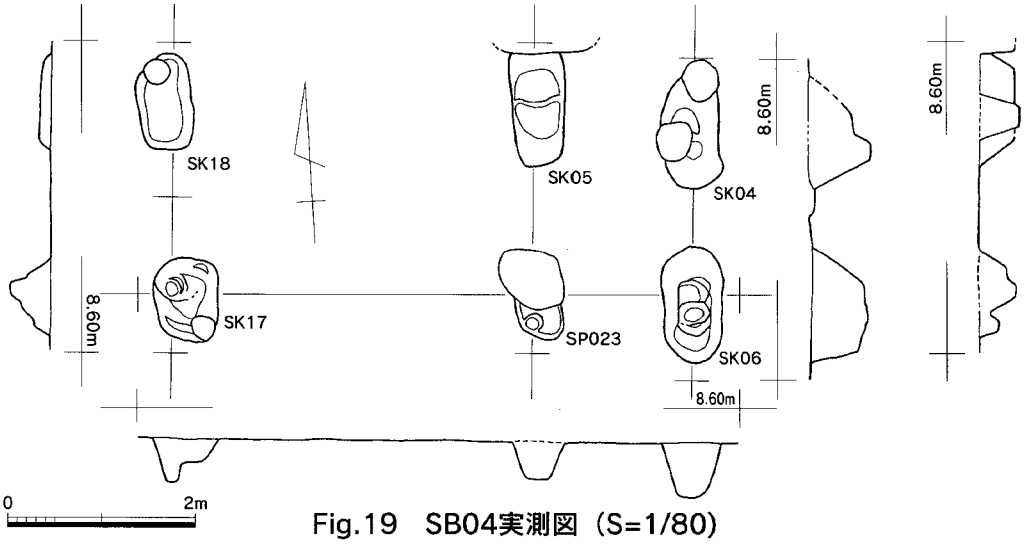


Fig.19　SB04実測図（S=1/80）

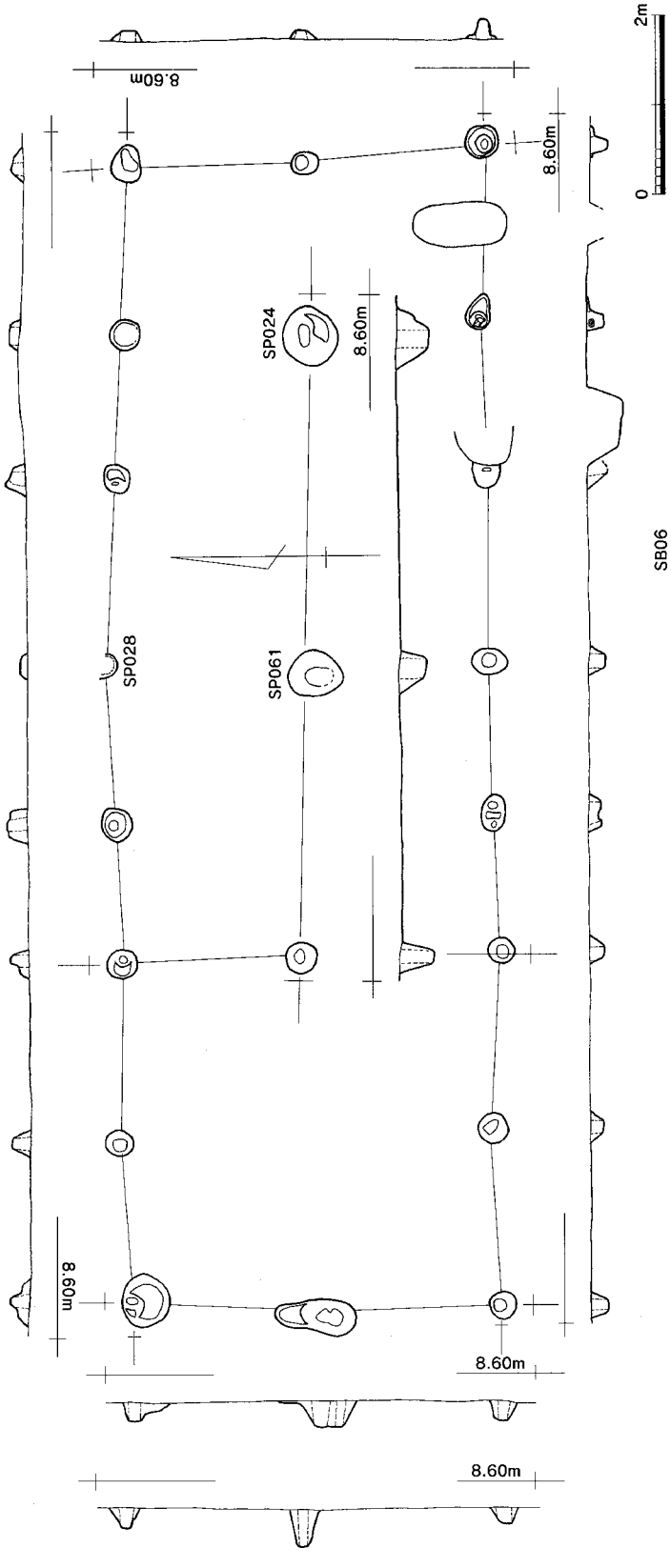


Fig.20 SB06実測図（S=1/80）

（4）竪穴住居（SC）

SC01（Fig.21、図版4-2,3）は、調査区東側北隅で検出した竪穴住居の一部である。確認できた規模は、東西1.4m×南北1.9mである。掘方の深さは40cm前後を測る。貼床までの深さは20～30cmと壁側が緩やかに浅くなるが、明確にベッド状遺構があるわけではない。貼床面は若干の硬化が認められ、比較的明瞭である。壁際は壁周溝が廻る。掘方底面は平坦ではなく、凹凸がある。床面に径30cm弱の柱穴状の凹みがあるが、浅く、主柱穴ではない。なお覆土は自然のレンズ状堆積というよりは、水平単位があり埋戻しされた感のある堆積である（ただし地山ブロックは含まない）。遺物は覆土と貼床中から破片が散漫に出土した。調査区東側際の貼床面がやや凹んだ部分から、床直上で高坏坏部が出土した（Fig.25-6）。他の遺物も含めて（Fig.25）、古墳時代前期前半頃の住居であろう。

3.出土遺物

出土遺物は、中世末～近世前期の輸入陶磁器・国産陶磁器（肥前系陶磁器）、中世～近世前期の土師器、古代の土師器・須恵器、古墳時代前期の土師器などがある。遺物の総量はパンケース3箱である。ただし、ほとんどは破片での出土であり、図化できる遺物は少なかった。また古代の土器は、小片がほとんどで遺構にも伴わないこともあり、今回は図化していない。

なお、遺物実測図は**Fig.22～23**に掲載したが、**遺物観察表**を作成したので（**Tab.1～2**）、詳しくはそちらも参照されたい。なお近世陶磁器の分類と編年は、大橋康二 1989『肥前陶磁』 ニューサイエンス社、九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会などを参考にした。中世の輸入陶磁器については、博多分類を参照した（森本朝子

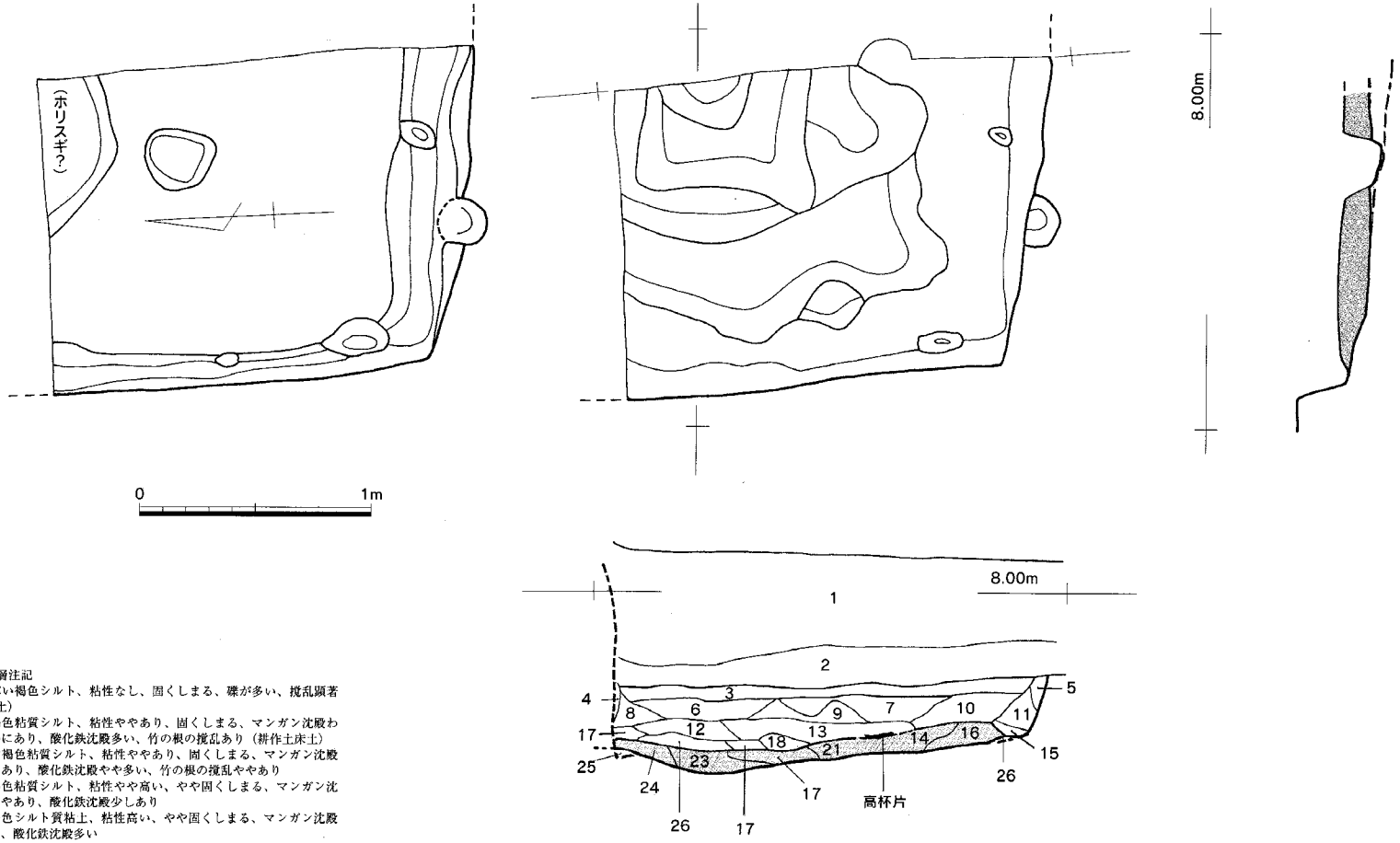


Fig.21 SC01 実測図・土層図 (S=1/30)

SC01土層注記

1. にぶい褐色シルト、粘性なし、固くしまる、礫が多い、撹乱顕著（表土）
2. 黄褐色粘質シルト、粘性ややあり、固くしまる、マンガン沈殿わずかにあり、酸化鉄沈殿多い、竹の根の撹乱あり（耕作土床土）
3. 灰黄褐色粘質シルト、粘性ややあり、固くしまる、マンガン沈殿多くあり、酸化鉄沈殿やや多い、竹の根の撹乱ややあり
4. 灰褐色粘質シルト、粘性やや高い、やや固くしまる、マンガン沈殿ややあり、酸化鉄沈殿少しあり
5. 灰褐色シルト質粘土、粘性高い、やや固くしまる、マンガン沈殿なし、酸化鉄沈殿多い
6. 灰黄褐色粘質シルト、粘性ややあり、固くしまる、マンガン沈殿多い、酸化鉄沈殿やや多い
7. 灰黄褐色粘質シルト、粘性高い、やや固くしまる、マンガン沈殿多い、酸化鉄沈殿やや多い
8. 灰褐色粘質シルト、粘性ややあり、固くしまる、マンガン沈殿ややあり、酸化鉄沈殿やや多い
9. 灰黄褐色シルト質粘土、粘性高い、やや固くしまる、マンガン沈殿やや多い、酸化鉄沈殿やや多い
10. にぶい灰黄褐色粘質シルト、固くしまる、マンガン沈殿ややあり、酸化鉄沈殿多い
11. 灰褐色シルト質粘土、粘性高い、固くしまる、マンガン沈殿わずかにあり、酸化鉄沈殿多い
12. 黄褐色シルト質粘土、粘性高い、やや固くしまる、マンガン沈殿わずかにあり、酸化鉄沈殿非常に多い
13. 黄褐色粘質シルト、粘性やや高い、やや固くしまる、マンガン沈殿ややあり、酸化鉄沈殿非常に多い
14. にぶい黄褐色シルト質粘土、粘性やや高い、やや固くしまる、マンガン沈殿わずかにあり、酸化鉄沈殿非常に多い
15. にぶい灰褐色シルト質粘土、粘性高い、固くしまる、マンガン沈殿わずかにあり、酸化鉄沈殿やや多い
16. にぶい黄褐色シルト質粘土、粘性高い、固くしまる、マンガン沈殿わずかにあり、酸化鉄沈殿多い
17. 灰黄褐色粘質シルト、粘性ややあり、固くしまる、マンガン沈殿あり、酸化鉄沈殿多い
18. にぶい灰黄褐色粘質シルト、粘性ややあり、固くしまる、マンガン沈殿含なし、酸化鉄沈殿非常に多い
19. 黄褐色シルト質粘土、粘性高い、固くしまる、マンガン沈殿なし、酸化鉄沈殿非常に多い
20. 灰黄褐色シルト質粘土、粘性高い、固くしまる、マンガン沈殿多い、酸化鉄沈殿多い
21. 14層と同一層
22. 橙～灰褐色シルト質粘土、粘性高い、固くしまる、マンガン沈殿わずかにあり、酸化鉄沈殿非常に多い
23. にぶい黄褐色シルト質粘土、粘性高い、固くしまる、マンガン沈殿あり、酸化鉄沈殿多い
24. 橙～黄褐色シルト質粘土、粘性高い、やや固くしまる、マンガン沈殿あり、酸化鉄沈殿非常に多い
25. 橙～黄褐色シルト質粘土(地山)、粘性やや高い、固くしまる、マンガン沈殿なし、酸化鉄沈殿非常に多い
26. 黄褐色シルト質粘土（地山)、粘性高い、固くしまる、マンガン沈殿なし、酸化鉄沈殿多い

1984「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集)。また、古墳時代前期の土器は、久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIXの分類と編年に基づいている。

Fig.22は主に溝状遺構と土坑出土の遺物を掲載した。

1～3は、この時期の土師器編年が確立していないので不確かではあるが、径や底部の形状などから16世紀～17世紀前半頃と考えたい。

4は、18世紀第3四半期頃の肥前系染付磁器の碗で、SD08の時期を示す。

5は、肥前系陶器と思われるが、詳しい生産地や型式は不明である。

6は、SP028出土とあるが、型式的に疑問で、上部のSD04の遺物の混入の可能性が高い。二重格子文のある、推定波佐見窯系の染付磁器皿である。18世紀後半～19世紀初頭か。

7は、内面は菊花文、外面は退化した唐草文の肥前系染付磁器の皿で、外面文様は類例が少ないが、器形と外面唐草文から18世紀前半頃のものであろう。SD05の時期を示すか。

8は、蛇の目凹形高台を有する、二重格子文の推定波佐見窯系の染付磁器皿である。18世紀中頃～後半であろう。SD06上面出土で、溝が完全に埋没した時期を示すか。

9は、明末の青花磁器の碗。内底は菊花文。17世紀初頭前後か。

10は、龍泉窯系青磁Ⅴ類の碗の底部（博多分類)。16世紀後半～17世紀初頭前後。9、10は、SD06が機能している時期幅を示すか。

11は、土師器坏だが、底部形状や法量から16世紀後半～末頃であろう。

12は、SD08出土の肥前系象嵌陶器碗の破片。朝鮮陶磁によく似るが、胎土から肥前系であろう。

13は、明末の青花磁器碗ないし坏。内底に幾何学状ないし渦巻状の文様がある。

14~19は、SK12出土の遺物。肥前陶磁の編年から18世紀中頃を前後するもの。**14**の陶器擂鉢は窯（生産地）や型式が不詳だが、広義の肥前系の範疇であろう。**15**の土師器坏は、体部が内湾し、底部は回転ヘラケズリ状のもの（板目圧痕もある)。

20~25は、SK13出土の遺物。肥前陶磁の編年から、18世紀第3四半期を前後する型式とセットである。

Fig.23には主に柱穴出土遺物を掲載した。

1は、黒褐色から暗茶褐色の光沢ある不透明釉の陶器甕の底部。内底に他個体の重ね焼きによる溶着痕がある。窯（生産地）や型式は不詳だが、広義の肥前系であろう。18世紀頃か。SD05出土。

2は、土師器皿で、底部形態はFig.22-2,3の坏と類似。16世紀末～17世紀前半か。SP015出土。

3は、土師器皿で、底部形態はFig.22-11の坏と類似。16～17世紀前半か。SP036出土。

4は、土師器坏で、体部が内湾するもの。底部は糸切りのようだが、形態的にFig.22-15のようなものに繋がるものか。SP030出土。

5は、土師器皿で、Fig.22-11と類似。16世紀末前後か。SP049出土。

6は、土師器皿で、法量は異なるがFig.22-1、Fig.23-3と形態は類似する。16世紀末～17世紀前半か。SP045出土。

7は、口径9.9cmのやや大きい土師器皿で、3,6の底部と類似。16世紀末～17世紀前半か。SP042出土。

9は、土師器皿で、底部から体部への立ち上がりの角がやや丸い。16世紀末～17世紀前半か。SP040出土。

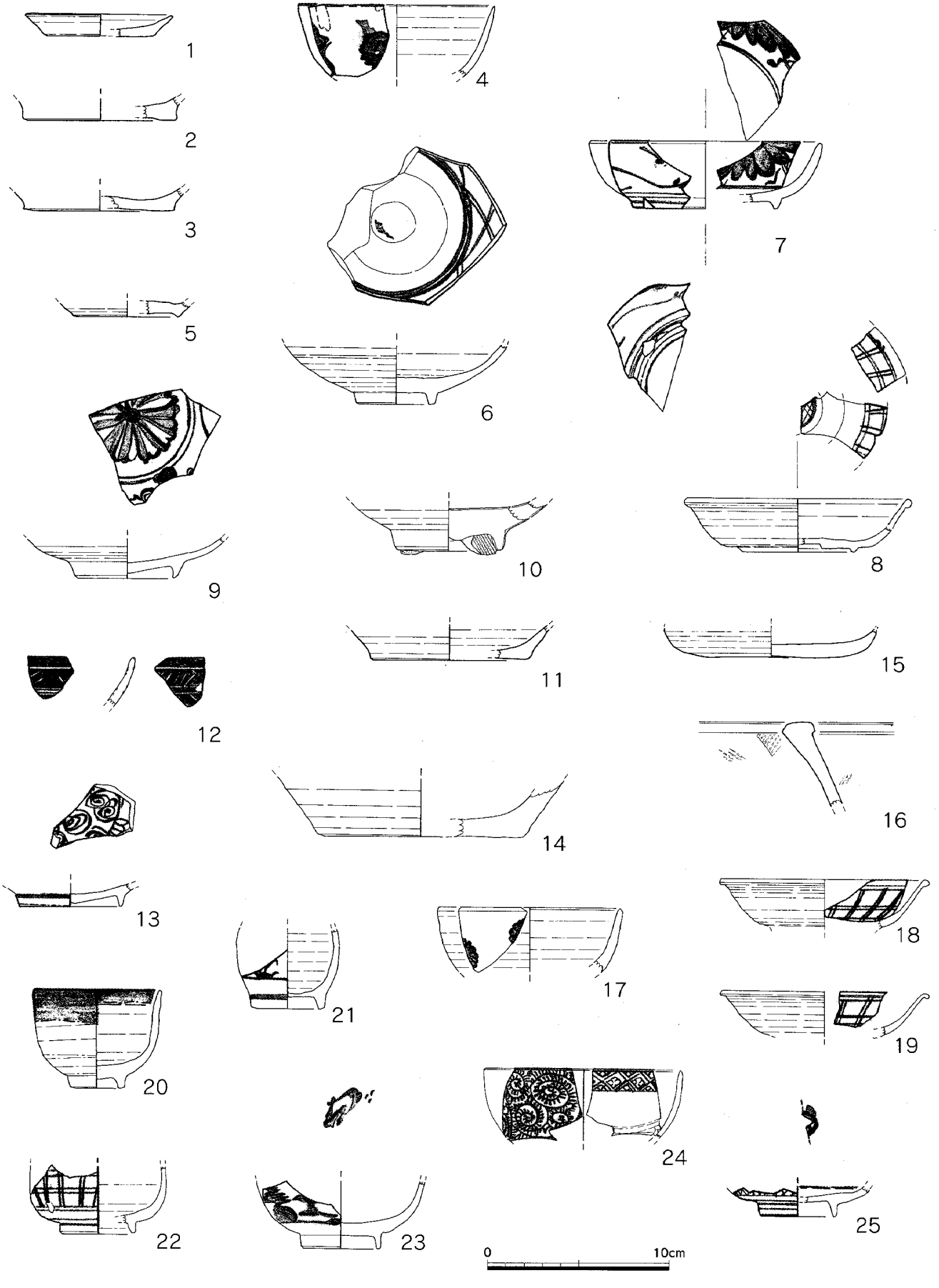


Fig.22 溝状遺構（SD）・土抗（SK）出土遺物（S=1/3）

Tab. 1 Fig. 22出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
1	023		SD01最上		土師器・皿	(8.0)		(5.8)	1.2	精良	鈍い黄橙		
2	024		SD01最上		土師器・杯			(8.3)	(1.3)	精良・焼土粒、金雲母を わずかに含む	外　浅黄橙 内　鈍い黄橙		
3	025		SD01Ⅱ区		土師器・杯			(8.2)	(1.3)	精良・金雲母微粒、焼土粒 わずかに含む	褐灰色		
4	041		SD08		肥前系染付磁器・碗	(10.9)			(3.95)	灰白色・精良	わずかに青味を帯びた 灰白色透明釉・細かく 氷裂	18c中～後	
5	036		SD06Ⅴ区		陶器・碗			(5.8)	(0.85)	淡灰黄色・やや粗く軟質	茶緑色透明釉・氷裂		釉は大半が剥がれ落ちる
6	011		SP028?		肥前系染付磁器・Ⅲ			4.4	(3.45)	灰白色・やや粗	わずかに緑色を帯びた 灰白色透明釉	18c中 ～19c初	二重格子文　波佐見？ SD04か
7	027		SD05Ⅱ～Ⅳ		肥前系染付磁器・Ⅲ	(13.0)		(8.0)	3.7	灰白色・精良	灰白色透明釉	18c前	
8	028		SD066Ⅲ 区上面		肥前系染付磁器・Ⅲ	(12.6)		(6.2)	2.95	灰白色・精良・蛇の目凹形 高台	やや青みを帯びた灰 白色透明釉	18c中～後	二重格子文　波佐見？
9	034		SD06Ⅱ区		青花磁器・Ⅲ			(5.8)	(2.3)	灰白色・精良	外　淡青緑色透明釉 内　灰白色透明釉	17c初	図版4-4
10	038		SD06Ⅶ区		龍泉系青磁Ⅴ類・碗			6.0	(2.95)	灰白色・精良	緑灰色透明釉・大きく氷裂	16c後	
11	033		SD06Ⅲ 上SK11上		土師器・杯			(8.8)	(1.9)	精良・焼土粒、金雲母を わずかに含む	外　浅黄橙 内　暗灰色		
12	042		SD08		肥前系？象嵌陶器・碗？				(2.7)	暗灰色・精良	透明釉		鉄銹地に白土象嵌
13	009		SK02北半		青花磁器・碗			(5.5)	(1.3)	灰白色・やや粗	青みを帯びた灰白色 透明釉	16c末 ～17c初	
14	016		SK12		陶器・擂鉢			(11.3)	(3.25)	暗灰色・やや砂粒含むが 精良	暗茶色不透明釉 (鉄錆)		
15	015		SK12		土師器・坏			(9.6)	(1.6)	精良・1～2mmの石英、 長石わずかに含む	淡橙色 内外底部:暗灰色		
16	014		SK12		土師質土器・甕？				(4.7)	精良・1mm前後の石英、長 石、金雲母をわずかに含む	淡橙色		
17	013		SK12		肥前系染付磁器・碗	(10.2)			(3.55)	淡灰色・精良	淡灰色透明釉	18c中	印判手　菊文
18	010		SK12		肥前系染付磁器・Ⅲ	(11.7)			(2.75)	灰白色・精良	灰白色透明釉	18c中	二重格子文　波佐見？
19	012		SK12		肥前系染付磁器・Ⅲ	(11.6)			(2.45)	灰白色・精良	青みを帯びた灰白色 透明釉	18c中	二重格子文　波佐見？
20	017		SK13		肥前系陶器Ⅱ期・碗	7.05		2.9	5.45	淡灰黄色・やや粗	灰黄色透明釉・氷裂 口縁～体上部青緑色 不透明釉	18c中～後	肥前内ノ山窯？ 図版4-6
21	021		SK13		肥前系染付磁器・瓶		(5.7)	4.0	(4.5)	灰白色・精良	灰白色透明釉		
22	020		SK13		肥前系染付磁器・碗		(7.4)	(4.1)	(3.75)	灰白色・精良	わずかに青味を帯びた 灰白色透明釉	18c中～後	二重格子文
23	018		SK13		肥前系染付磁器・碗			4.4	(3.85)	黄色味を帯びた灰白色・ やや粗	灰白色半透明釉・氷裂	18c中～後	山水文　見込み銘
24	022		SK13		肥前系染付磁器・碗	(11.0)			(3.0)	灰白色・精良	灰白色透明釉	18c中	蛸唐草文
25	019		SK13		肥前系染付磁器・碗			(4.2)	(1.75)	灰白色・精良	淡灰色半透明釉	18c中～後	斜格子文　見込み銘

Tab. 2 Fig. 23出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				胎土	釉・外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
1	026		SD05Ⅱ区		陶器・甕			16.4	(8.0)	暗灰色・2～3mmの砂粒 含みやや粗	光沢のある暗茶色 不透明釉	18c か	図版4-5
2	043		SP015掘方		土師器・皿			(6.2)	(1.3)	0.5mm前後の石英、長石を 少量含む	外　灰黄色 内　橙色		SB01
3	047		SP036掘方・柱		土師器・皿			5.4	(1.65)	精良・焼土粒わずかに含む	浅黄橙		図版4-7
4	046		SP030柱		土師器・坏			8.3	(0.9)	精良・2mm前後の焼土粒、 金雲母微粒わずかに含む	浅黄橙		
5	051		SP049		土師器・坏			(7.2)	(1.55)	精良・1～3mmの焼土粒 わずかに含む	外　浅黄橙 内　灰黄色		SB02
6	050		SP045掘方		土師器・皿	(8.5)		(6.5)	1.55	精良・2～3mmの焼土粒 少量含む	橙色を帯びた灰白色		SB07
7	049		SP042		土師器・皿	(9.9)		(6.8)	2.1	精良・風化により軟質	橙色を帯びた灰白色		SB02
8	045		SP024柱		肥前系白磁・紅Ⅲ	(6.2)		(5.4)	1.45～ 1.6	灰白色・精良	淡青灰色透明釉	18c前	SB06
9	048		SP040掘方		土師器・皿			(6.2)	(1.15)	精良・金雲母微粒わずかに含む	灰黄褐色		SB07

Tab. 3 Fig. 24出土遺物観察表

番号	整理番号	地区	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位cm)・()内は復元・残				石材	外面色調	時期	備考
						口径	最大径	底径	器高				
1	053		SD06Ⅲ上		砥石？	長(9.2)	幅8.9	厚4.75		石英斑岩或いは石英粗面岩	灰～黄灰色　微細な 石英、長石、白雲母から 成る		

8は、肥前陶磁の白磁紅Ⅲで、18世紀前半か。SP024出土。

以上のうち、土師器の坏・皿類は底部形状から数種類に分かれるが、底部回転ヘラケズリのものが18世紀代である以外は16～17世紀と推定できるが、それらの型式の前後関係については確証はない。この時期（15世紀以降）は、博多遺跡群でさえすでに資料が豊富にありながら土師器の坏・皿類の編年が未確立である。ましてや、このような土器はより地域的な生産を行なっていると考えられるので、小平野単位での編年の検討が今後不可欠である。

Fig.24は断面菱形に近い不整長方形の砥石で、前後が欠損する。使用面は2面ある。石材はきめが細かく、石英斑岩ないし石英粗面岩である。

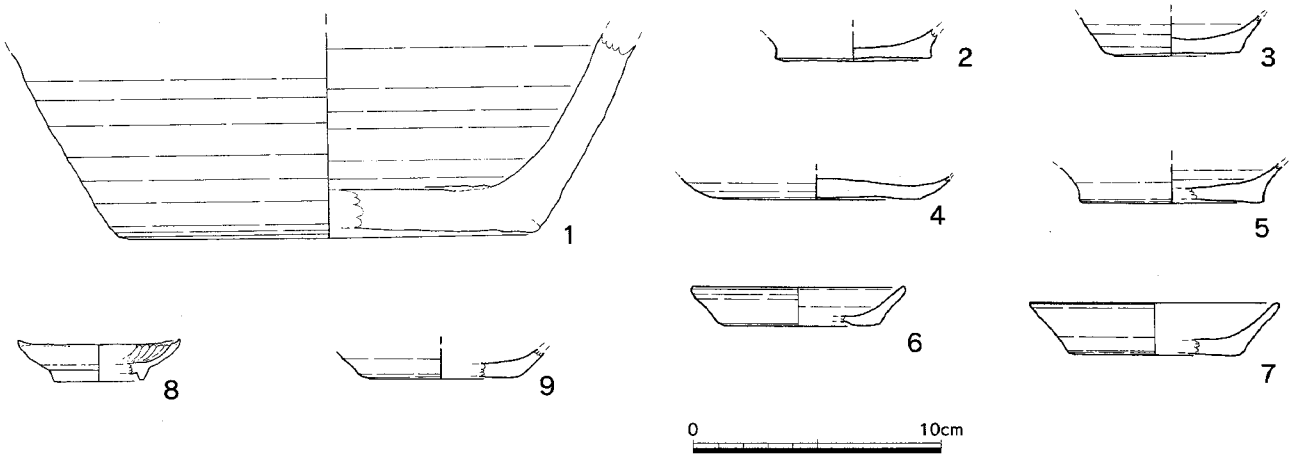


Fig.23 溝状遺構（SD）・柱穴（SP）出土遺物（S=1/3）

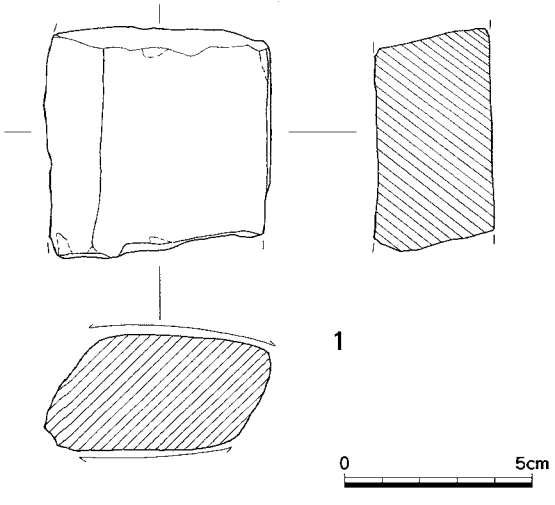


Fig.24 SD06出土石製品（S=1/2）

Fig.25はSC01出土の**古式土師器**を掲載した。

1と**2**は同一個体の可能性が高い在来系（A系統）甕の破片で、径の復元は無理。いずれも東側覆土中の出土。1の口縁部は外反気味で、端部は上方を面取後に少し丸くした模様。外面は摩滅しているが、やや左上がりの粗いタタキの痕跡がかすかに残る。内面は摩滅し不明。2の胴部は、頸部外面はヨコナデ気味だが、以下は摩滅し不明。内面は頸部付近にシボリ状のしわがあり、ナデを施す。以下の胴部内面は、摩滅し不明瞭だが、右上がりの擦痕のある板ナデがある。色調は、灰白色から浅黄橙色を呈する。胎土は、やや粗い土で、砂礫が多い。混和砂礫は、1～5mmの石英粗粒多数、1～3mmの長石および花崗岩を若干、1mm以下の角閃石ないし輝石を微量含み、赤色粒子（酸化鉄粒）を微量含む。粗雑な調整と想定されるプロポーションから、古墳初頭以後であろう。糸島地域では、古墳前期中頃まで在来系甕が存続するので、住居の時期に伴う可能性もある。

3は、C系統（畿内系）の小型二重口縁壺の口縁部。東側覆土中の出土。小片で径の復元は無理。端部はすぼめる感じで、古相を呈する。口縁部は内外ともヨコナデ。色調は、橙色～浅黄橙色を呈する。胎土は、比較的緻密な土で精良（精製器種B群の水漉胎土には劣る）、砂礫を少量含む。混和砂礫は、1mmまでの石英・長石・花崗岩を少量、赤色粒子小粒を少量、滑石または片岩の1mm以下の微粒を微量、雲母微粒を微量含む。ⅡB～ⅡC期のものであろう。

4は、B系統の壺の頸部前後の破片。覆土最上層で出土。小片で径の復元は無理だが、あまり大きくならない。外面は、摩滅が著しいが、頸部の屈曲に右上がりのかすかなしわがあり、タタキの痕跡の可能性がある。内面は、口縁部に続く部分はヨコナデ、頸部はナデ、胴部は右上がりのナデ（摩滅したケズリの可能性もある）を施す。色調は、外面は橙色～にぶい黄橙色、内面は暗褐灰色～にぶい褐色を呈する。胎土は、緻密な土で精良、砂礫を多く含む。1～4mmの石英・花崗岩粗粒を多く含み、0.5～3mmの長石を含み、1mm以下の角閃石ないし輝石も含む。また雲母微粒を少量含む。

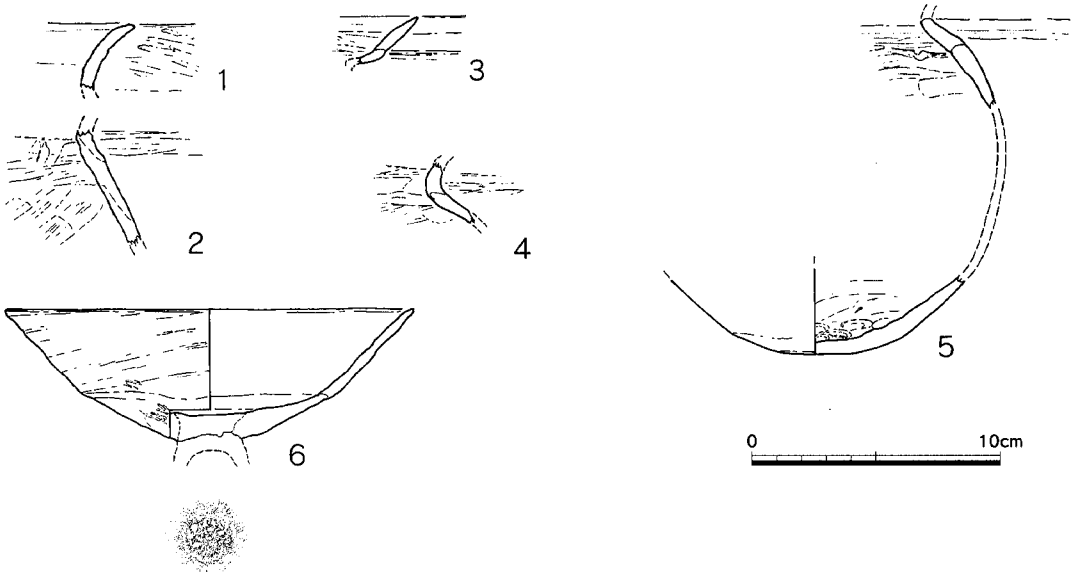


Fig.25 SC01出土土器（S=1/3）

5は、上下同一個体と思われるB系統技法でD系統模倣の小型壺。上部の破片は覆土最上層より、底部の破片は貼床内または東側の床面が少し凹む部分の床面直上から出土。上部の破片は、小片で径復元不可。外面は頸部ヨコナデ、以下は摩滅し不明。内面は、頸部ヨコナデ、頸部下はナデ（粘土紐積み上げ痕残る）、胴部は右方向の横ないし斜めの板ナデ（器壁が胴部中位に向かって少し薄くなり、摩滅したケズリか）。全体に粗雑な作り。底部の破片は、底は完全な丸底というよりはわずかにレンズ底状、外面は摩滅し調整不明、内面はケズリ？（摩滅し不明）、底部付近のみ押捺痕がみられる（ケズリとの前後が不明）。色調は、おおむね橙色、一部は浅黄橙色を呈する。胎土は、やや密な土にやや多量の砂礫が混じる。混和砂礫は、0.5～3mmの石英・花崗岩粗粒を多く含み、0.5～2mmの長石もやや多く含む。1mm以下の輝石ないし角閃石を少量含み、雲母微粒（0.5mmないしそれ以下）を微量含む。また赤色粒子も微量含み、分類不明の1mm前後の暗灰褐色岩石片（片岩か）をわずかに含む。古墳時代前期の範疇だが、細かい時期比定は難しい器種である。

6は、高坏の坏部（図版4-8）。東側貼床面の凹んだ部分の床面直上より出土。口径16.1cm（復元）、残存高5.2cmを測る。外面は、摩滅著しいが坏体部は右ナナメ上のしわがあり、タタキの痕跡か（タタキをナデ消しか）。坏体部下半から坏底部にかけて、かすかに細かいミガキがある模様（摩滅して不明瞭）。ナデ後ミガキか。内面は、摩滅してまったく不明。坏部口縁部は端部を丸くすぼめ、坏体部と坏底部の境の稜は明確な部分とほとんどない部分があり、凹凸がありきわめて粗雑な作り。脚部との接合は、脚部側（坏底部下面）に接合面の刻みのネガがあり、凸面付加法によるが、坏部自体の成形は、坏底部を輪台充填するもの。後述する高坏接合法の新分類のC4類。B系統高坏手法で高坏Dの形態と接合法を模倣したものであろう。この接合法は、ⅢA期に出現する接合法B3類の出現の前提であり、模倣対象の高坏D類の想定型式（坏部が深くなった段階か）などから、6の高坏はⅡC期の所産の可能性が高いと考えられる。とすれば、1・2、3の想定時期とも矛盾はないことになる。これらについては、次のまとめの章において考察したい。

第3章　調査のまとめ

1.青木遺跡群周辺の集落の変遷について

これについて検討する前に、まずは本調査の集落の変遷についてのべておく。まずSC01の古墳時代前期の住居があるが、単独であり、その集落としての広がりは不明である。時期はかなり離れて、遺物から16世紀後半以降に溝と掘立柱建物からなる集落が出現する。出土遺物や柱穴の掘方の特徴

などから、SB01～SB04・SB07は16世紀後半から17世紀前半、SB05・SB06は18世紀前半から中頃と考えられ、前者にはSD07とSD06、SD01が、後者にはSD06が掘り直して存続するか、またはSD05が伴うと考えられる。少なくとも遺物から見ると、17世紀中頃から18世紀初頭については、明確な遺構は存在せず、あるいは集落が断絶した可能性もあるが、建物方位や溝方位は踏襲されており、断定できない。遺物がかなり少ないことと、調査面積が限られているので、そのように見えるだけかもしれないので、ここでは一時期断絶する可能性もあるとだけ述べておきたい。

さて、「調査地点の立地と環境」と重複するが（Fig.1も参照）、弥生時代中期～後期の遺構が1・2次調査でみられ、間の今宿バイパス部分は削平されていたものか不明であるが、あるいは一連の集落の可能性がある。ただし、遺構密度はあまりない。その後、2次調査で奈良時代の遺物があるが、遺構は不明であるので、おそらく丘陵の南側の近隣にその時期の遺構が存在するのであろう。その間の古墳時代遺構は今回初めて検出されたが、前期の住居1棟のみであり、不明な部分が多い。しかし、東600m、西600mにそれぞれ鋤崎古墳（中期初頭）、今宿大塚古墳（後期前半）があり、東西・南側周囲の丘陵上には多くの群集墳があることから、これらの生活基盤は青木遺跡群の位置が相応しく、おそらく古墳時代から奈良時代の集落は、まだ本調査の及んでいない遺跡群の南半分に多く分布しているのであろう。その後、中世になり青木遺跡群北半に集落が戻り、1・2次調査で13～14世紀の集落があり、3次調査で主に14～15世紀の集落がある。ただしこれらの調査では16世紀以降は不明である。4次調査では16世紀後半以降の集落があり、この周辺に青木遺跡群北半の16世紀後半から18世紀前半の集落が存在するものか。この4次調査周囲の集落も18世紀後半には水田化するとみられ、それ以降の集落は、最近の都市化が及ぶ前までの集落の立地にほぼ等しいであろうと考える。以上のように概観すると、15～16世紀については今のところ希薄であり（3次調査は削平もあるが遺構は少なく、4次調査は16世紀でも後半ないし末以降）、青木遺跡群のみならず周囲の遺跡群も含めて考えるべきか。青木遺跡群の北西500mの今宿五郎江遺跡北部では（6・7次調査）、13～16世紀までの継続的な、かなり濃密な遺構の集落を検出している（『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.16 2003年刊行予定に概要を報告）。部分的な調査だが、これが中世におけるこの地域の母村的な集落であるかもしれない。いずれにしても、今後の周辺の試掘調査を含めた調査の進展によってこの地域の歴史が明らかになっていくであろう。

2.古式土師器の分類と編年について

SC01出土の古式土師器は、破片が多く、覆土中のものが多いので、良好な一括資料ではない。しかし、限られた調査ではあるが周囲に同時期の遺構が無く、覆土が自然堆積ではなく埋戻しの可能性があり、床直と覆土最上層の遺物が同一個体のものがあることから（Fig.25-5）、少なくとも比較的短い時間幅の埋没の所産であるという言うことはできよう。また各遺物の説明で述べたように、時期が分かるものはⅡC期前後である。ⅡC期（久住猛雄 1999、前掲参照）は、福岡平野ではすでに畿内系（C・D系統）にほぼ全て占められ、早良平野でも海岸部の先進的な西新町遺跡では同様であり、有田遺跡群や宮の前遺跡のようなやや内陸部でもすでに平均7割以上は畿内系に占められる（同時期遺構でも在来系が多いものもあるが少数化し、8割以上が畿内系の遺構が多数化）。ところが、今宿地区を含む糸島平野ではいまだに半数近くが在来系である。例えば、今宿5次SX017一括土器群（福岡市報告書第654集）や、飯氏3次35号住居一括土器群（福岡市報告書第352集）では、ⅡC期に確実にA系（在来系）甕が存在し（飯氏例はA系の方が多い）、ⅢA期古相でも飯氏3次43号住居一括土器群（第352集）のように少数残存する。糸島平野中央の三雲遺跡群でも、布留式系（D系統）の在地製作はⅡB期に開始するものの（中川屋敷Ⅰ-12-6号住居下層、八龍Ⅰ-7-1号住居）、ⅡC期では

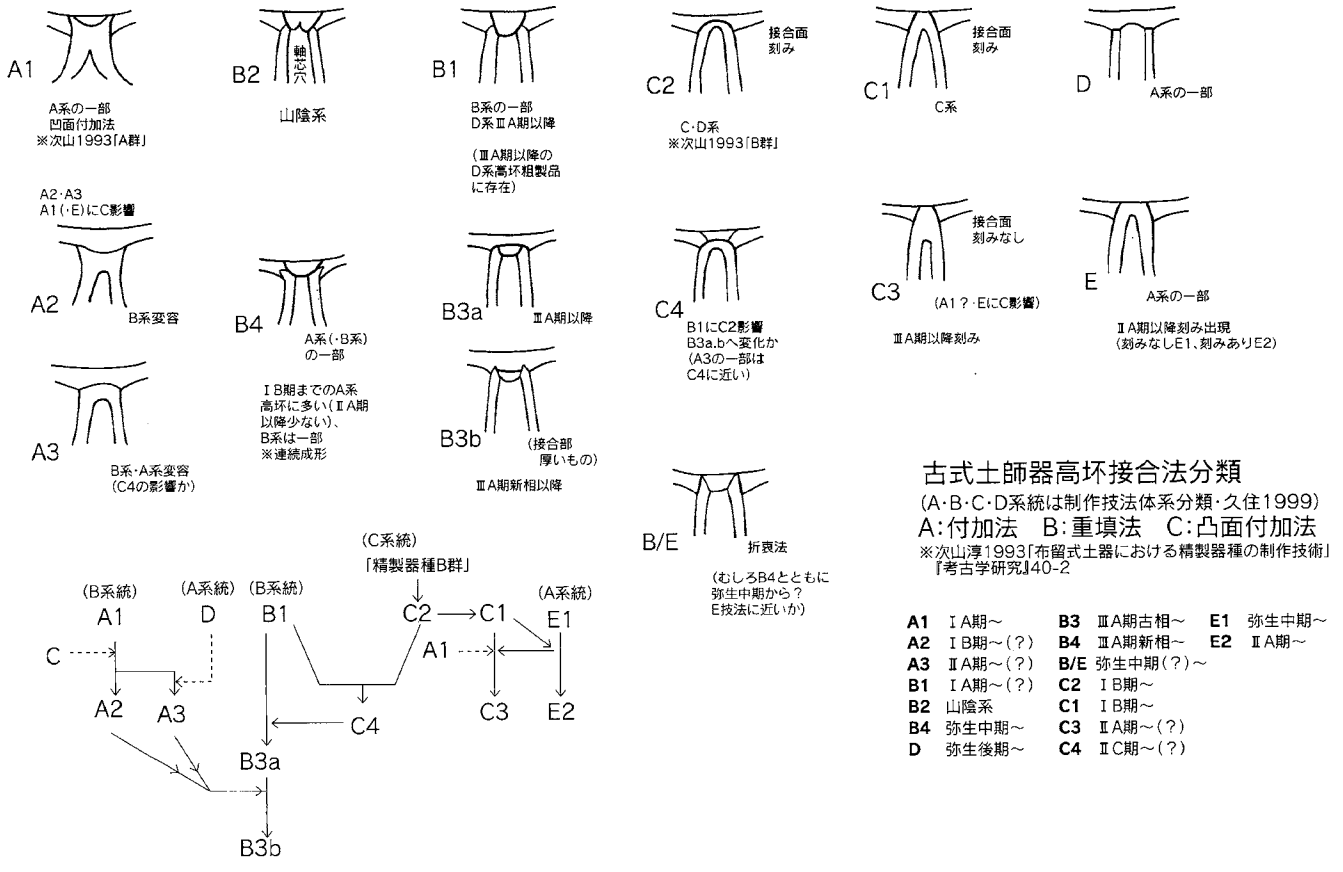
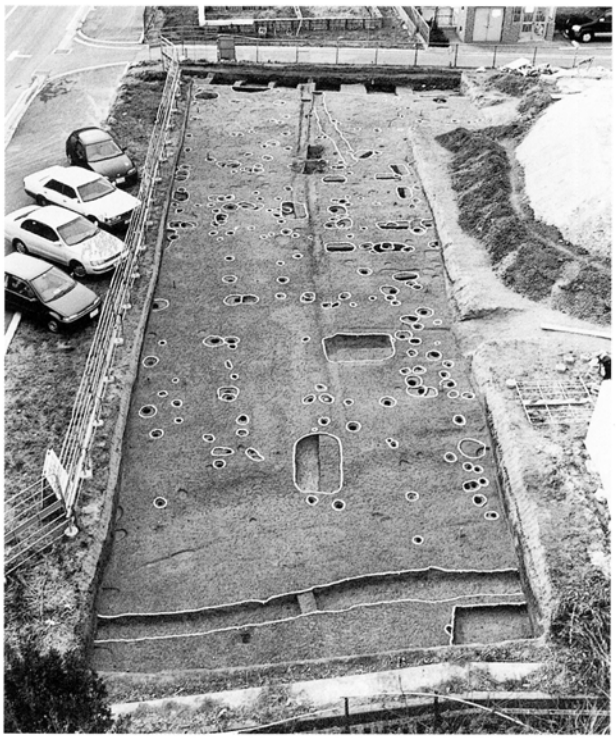


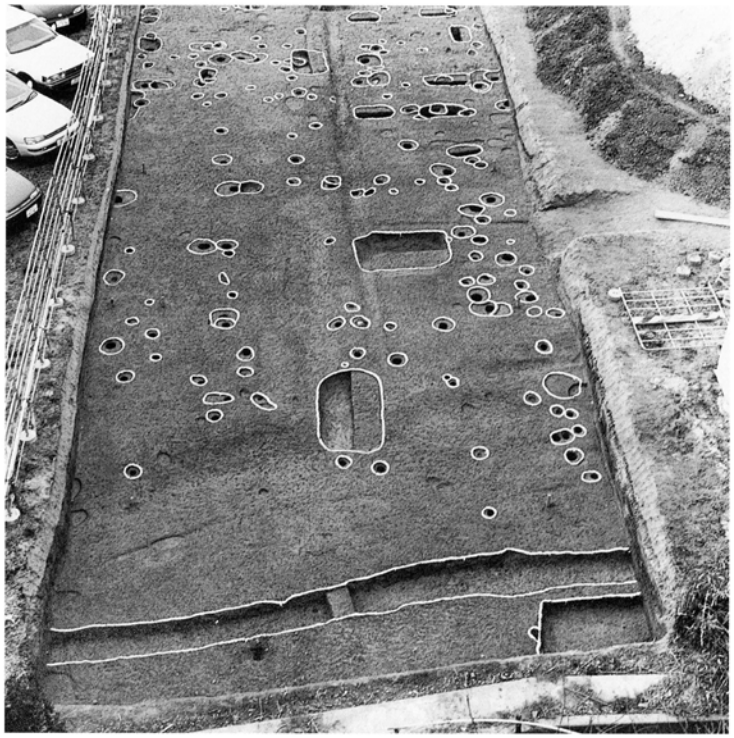
Fig.26 古式土師器高杯接合法分類図

3~4割前後はA系統土器であり（石橋地区大溝最上層、寺口地区大溝最上層＝ⅢA期含む、八龍地区大溝上層＝ⅢA期古相含む、中川屋敷Ⅰ-12-4号住居など)、ⅢA期古相でさえも八龍Ⅰ-18-2号住居のように少数のA系統が残る(なお糸島出土のⅡA期までの甕C・Dは確認したものは全て福岡平野産である)。今後、糸島平野における古式土師器の時期比定に関しては、十分注意する必要がある（在地系の残存と布留式系の共伴時期を単に「古墳初頭」とか「布留O式」としている記述が多い)。したがって、Fig.23-1のような推定ⅢC型式の甕は、同図6の高坏などと伴っても問題はない。

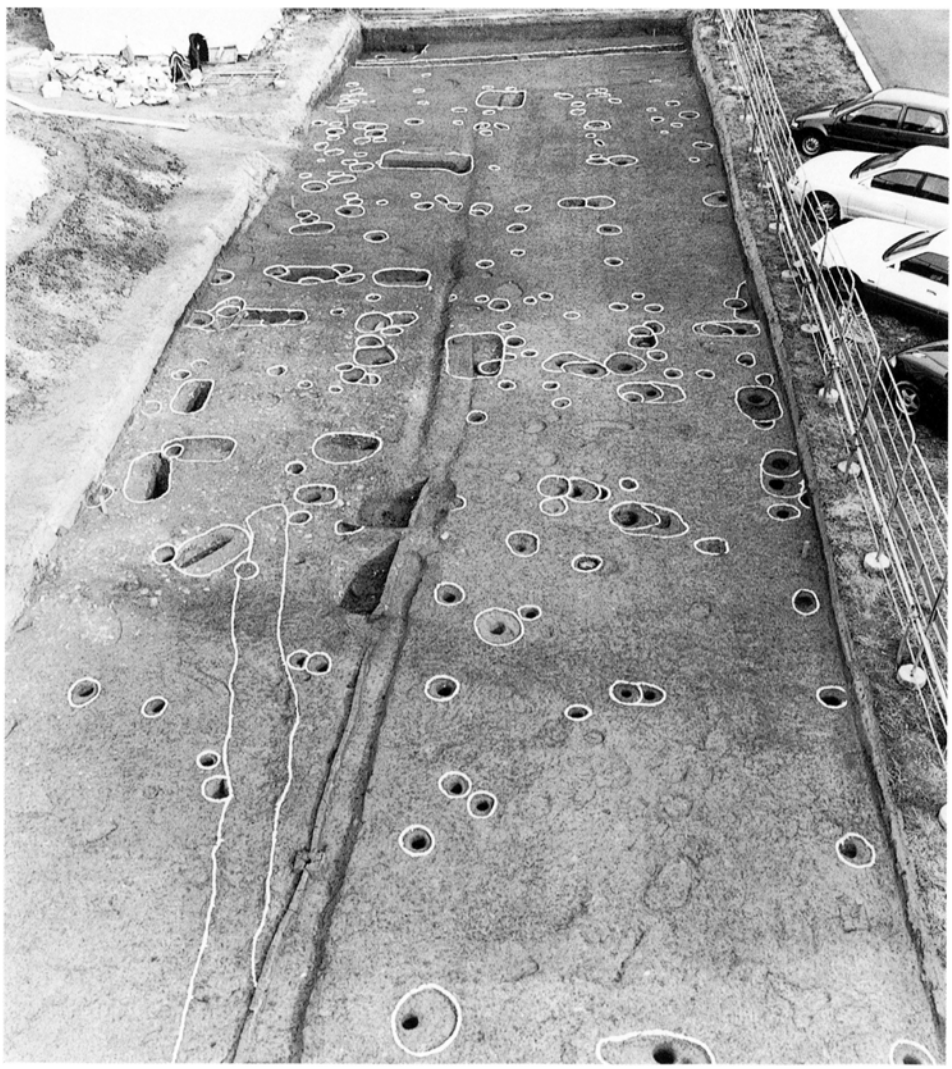
Fig.26には高坏の接合法分類を掲げた。この図は以前に発表したものの修正・追加図であるが(久住猛雄 2002「鋤崎古墳出土の土器について」『鋤崎古墳』福岡市報告書第730集、久住 2002「出土土器の位置付けについて」『元岡・桑原遺跡群1』福岡市報告書第722集)、Fig.23-6のC4類と、各分類の系統図と管見での出現時期を示している。これらのうち、B4類やB/E類（以前はB/C類としたが訂正する)、およびD類、E類は弥生時代以来の接合法で（cf.武末純一1987「須玖式土器」『弥生文化の研究』第4巻　弥生土器Ⅱ　雄山閣)、古墳初頭のⅡA期以降消長してゆく（D類は高坏Aの一部に、E類は変容したE2類が残るが)。なおB4類とB1・B2類の相違は、脚部から坏部が連続的成形かそうでないかの違いで、系統的に両者は分けるべきであり、B4類はむしろB/E類と類似し、またB/E類はB類とE類の折衷である（B/C類としたが、C類以前に存在しうる)。なお高坏の接合法を付加法と充填法で単純に二分し、前者から後者へ移行するとした編年があるが（重藤輝行2002「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器』九州前方後円墳研究会第5回発表要旨資料集)、その「1・2期」（久住ⅡB期～ⅢA期古相）での高坏D（久住分類）以外の高坏を問題とせず（特にB系統高坏)、「3期」以降（久住ⅢA期新相以降）でも充填法以外が存在することを無視しており、実態はより複雑であり、さらに細かい検討を要するであろう。



１.青木４次調査区全景（東から）



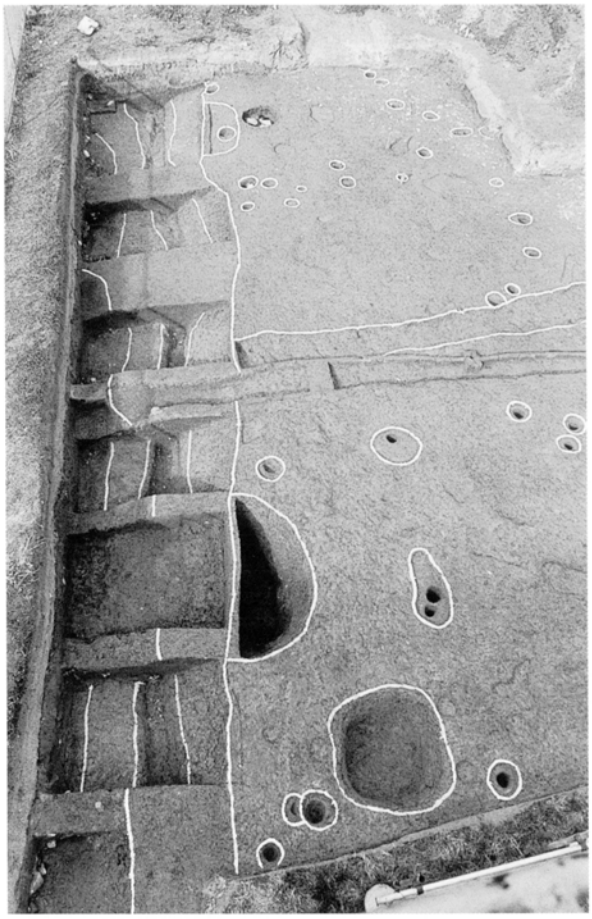
３.調査区東半遺構状況（東から）



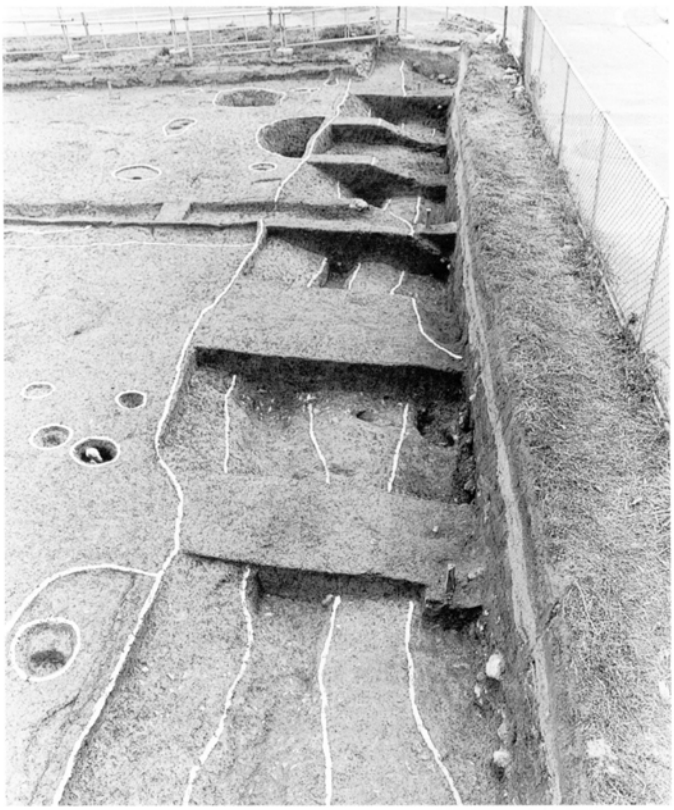
２.調査区中央東側遺構状況（西から）

図版２

１.調査区西側遺構状況（北から）

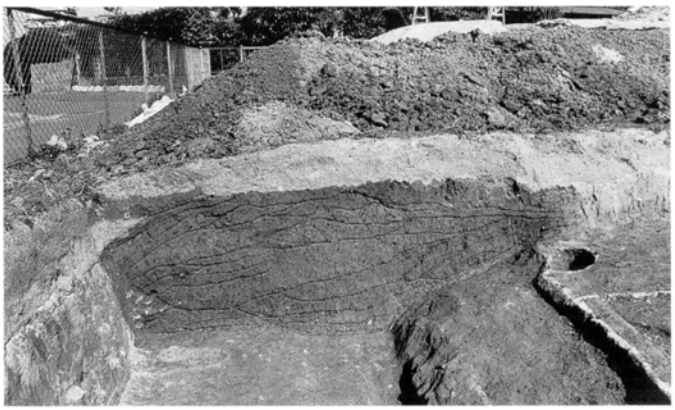


２.調査区西側遺構状況（SD04～07ほか）
（南から）

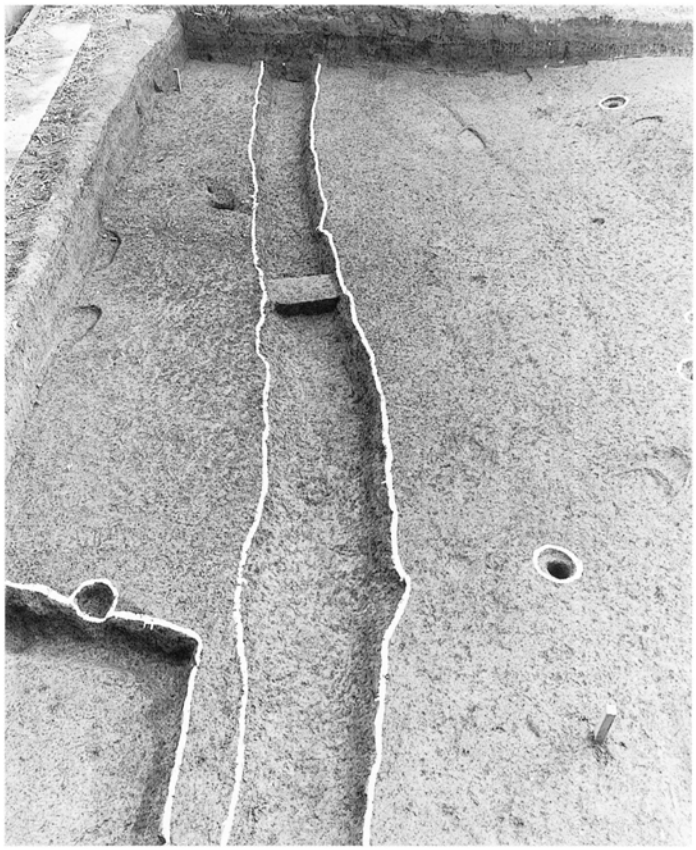


３.調査区西側溝状遺構（SD05～07）（北から）

４.SD06・07南半、土層③（北から）



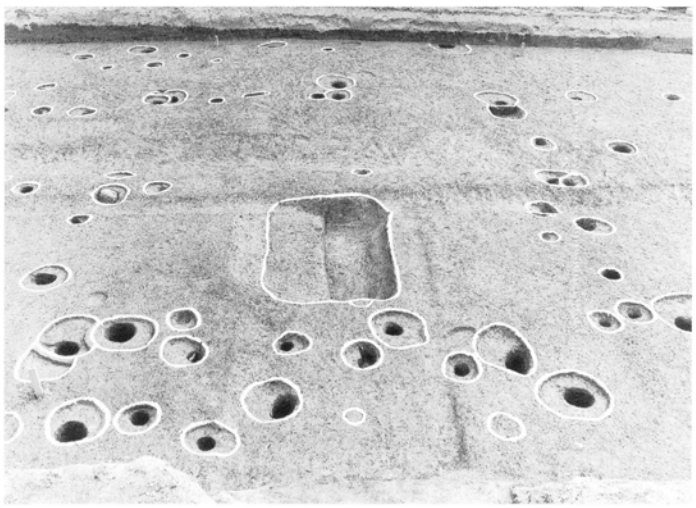
５.SD06・07北側、土層①（南から）



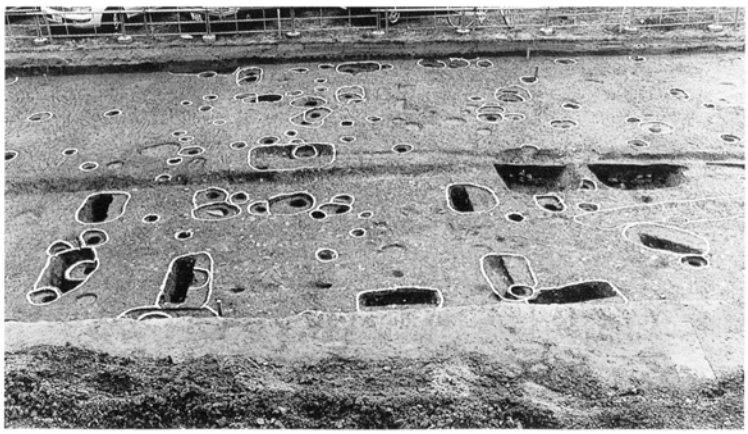
1.SD01掘削状況（北から）

2.SD01北側土層（南から）

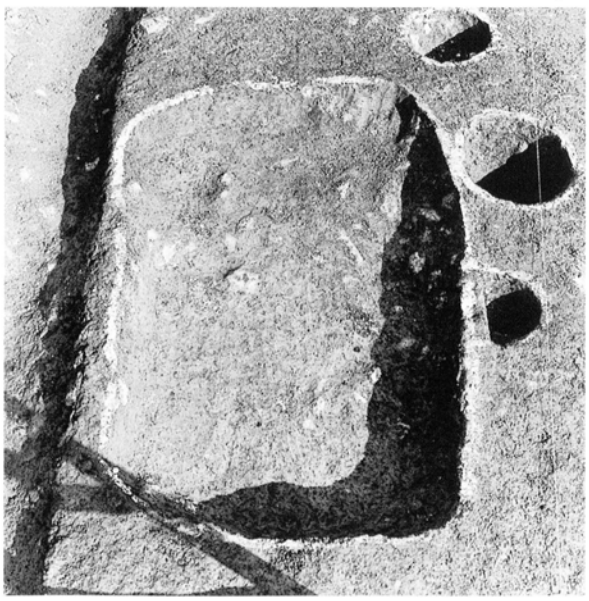
3.SK11掘削状況（南から）



4.SB01・02、SK02（中央）（北から）



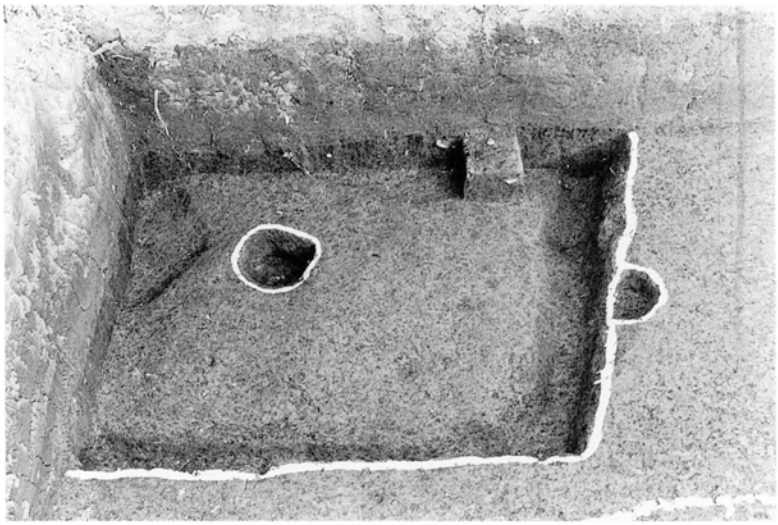
5.SB04（手前）ほか調査区中央建物（北から）



6.SK08掘削状況（南から）

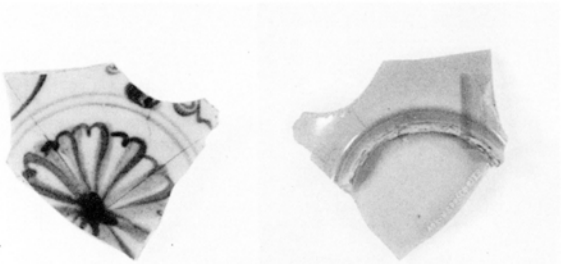
図版4

1.SK01掘削状況（東から）



2.SC01床面検出状況（西から）

3.SC01掘り方掘削状況、東側土層（西から）



（内）　（外）

4.SD06出土青花皿（Fig.22-9）

（外）

（内）

5.SD05出土陶器甕（Fig23-1）

7.SP036出土土師器皿
（Fig.23-3 ）

6.SK13出土陶器碗
（Fig.22-20）

8.SC01出土高杯（Fig.25-6）

遺跡名	青木遺跡群第4次調査		
遺跡調査番号	0148	遺跡略号	AOK-4
調査地地籍	福岡市西区今宿東1丁目121,122-1	分布地図番号	112-0628
開発面積	995.54m²	調査面積	373.8m²
調査期間	2002（平成14）年1月7日～2月8日	事前審査番号	13-2-682

青 木 3

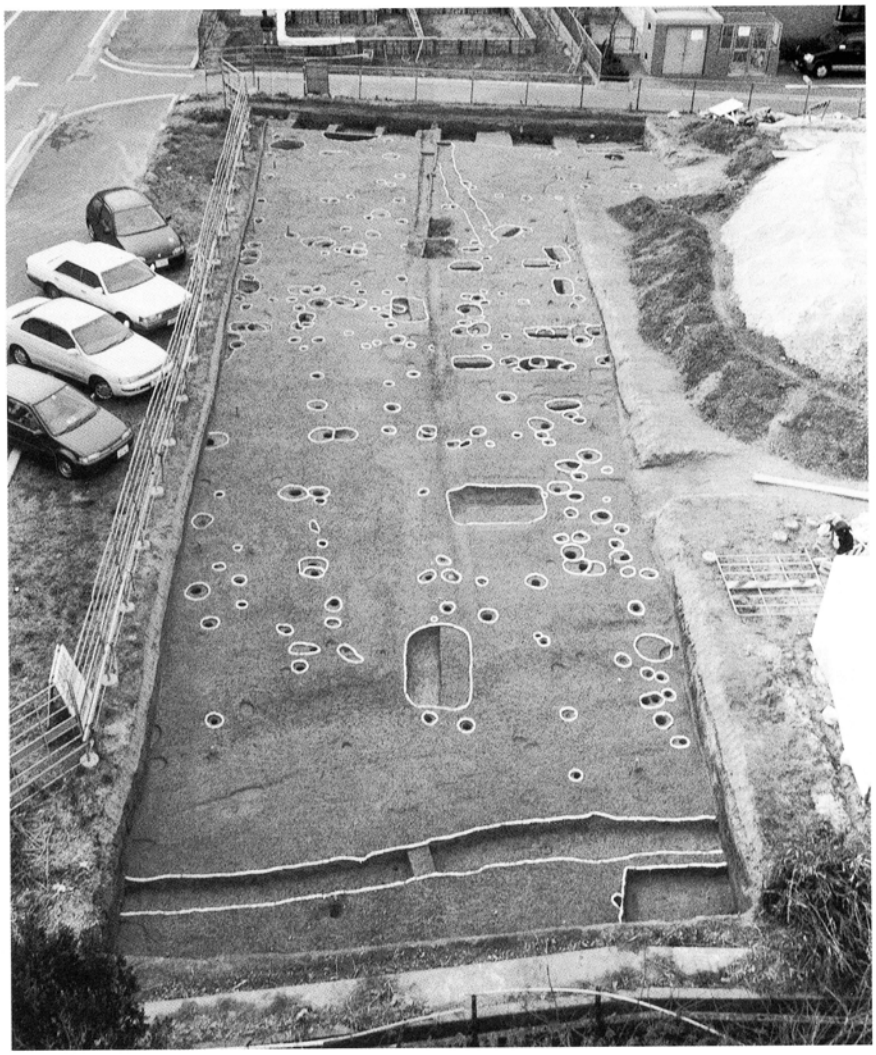
－青木遺跡群第4次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第734集

２００３年３月３１日

編集・発行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印　　刷　株 式 会 社 旭 プ ロ セ ス
福岡市南区清水2丁目13-5



青木3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第734集

2003

福岡市教育委員会